



Vol.127
2013年07月16日

発行

発行人岡本和久
I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社【ホームページ】
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-8-6広尾186ビル7階
TEL: 03-5789-9821 FAX: 03-5789-9822
お問い合わせ: [メールフォーム](#)

今月の ひとこと

日銀の物価展望レポートに記載されている政策委員の大勢見通しによると、消費増税分を含め、消費者物価（生鮮食品を除く）は2013年度には+0.7%、2014年度には+3.4%、2015年度には+2.6%上昇するとなっています。仮にそれ以降、政府が目標とする2%の物価上昇が続いたとすると、いま100万円で買える消費者物価のバスケットが10年後の2023年度には123万円になっている計算になります。逆算すると100万円の現金はいまの価値でいえば81万円に減少しているということです。いままではデフレで、現金さえ持っていれば購買力は増加していたのです。しかし、これからは状況がかなり変わってくるのではないかと思います。せめて物価上昇のみには資産の名目価値を増加させることが必要な時代に入っているのではないのでしょうか。

FACEBOOK上でクラブ・インベストラ이프の仲間が活発な議論をしています。FACEBOOKに登録している方、ぜひ、ご参加ください。（2013年7月14日現在で参加者数は1459名です。まずは2000人を目指しましょう）

[今月号の記事をすべてダウンロードする](#)

特集1 座談会：グローバル化時代の日本の課題

渋沢 健、大江 英樹、岡本 和久



コモンズ投信の会長職に加え日本国際交流センターの理事長に就任された渋沢健さんを、大江英樹さんと二人でお訪ねしました。グローバル化時代における日本の課題や、おカネ、投資、寄付など幅広い議論を展開することができました。

[読んでみる](#)

特集2 中国がわかるシリーズ10 漢帝国の盛世と武帝の時代(後)

ライフネット生命保険株式会社 代表取締役会長兼CEO 出口 治明

匈奴との対峙によってシルクロードが誕生します。武帝時代の漢の最盛期から衰亡までを解説していただきました。

[読んでみる](#)

特集3 インベストラ이프・アーカイブより「合計197歳が『100年に一度』を語りあう（後編）」

故三原 淳雄、澤上 篤人、岡本 和久

先月号に続き、巷を賑わす「100年に一度」につき語り合いました。今回は投資の本質や金融危機後の考察などにつき触れています。この記事は「インベストラ이프」2009年7月号に掲載されたものです。

[読んでみる](#)

クラブ・インベストラ이프とは？

人生を通じての長期投資は孤独な長旅です。この長旅に耐え、大きな喜びを得るには、資産運用を行うための基礎となる知識と孤独な旅を支えあう仲間が必要です。「将来の自分はいまの自分が支える」ほかない時代、クラブ・インベストラ이프の活動は、豊かで幸せな人生のための投資を目指しています。

毎月、ネット上で会報誌を公開するほか、FACEBOOKやTwitter上で議論の場を提供し、各地でのセミナーを開催しています。

まったく投資の経験のない方も多数、参加しておられます。大手金融機関から完全に独立しているので、特定の商品をお勧めすることも販売することも一切ありません。

<FACEBOOK、TWITTERへの投稿の際のお願い>

1. 個別商品の販売・推奨、あるいはそれに類する投稿はご遠慮ください
2. 発言はあくまで個人としてのものとしてください
3. 企業広告はご遠慮ください

I-Oウェルス・アドバイザーズのメール・マガジン

メルマガへのご登録は下記のメールアドレス宛に、空メールを送信下さい。購読は無料です。

mag@i-owa.com

毎月15日配信 **無料**

Facebook

Facebook上のグループ、クラブインベストラ이프
<http://www.facebook.com/groups/investlife/>

Facebookへの登録が必要です。リクエストボタンを押して入会申し込みをしてください。

Facebookへはこちらをクリック

Twitter上のグループ
クラブインベストラ이프
http://twitter.com/c_investlife

Twitterへの登録が必要です

@c_investlifeさんをフォロー



バックナンバー

一覧

- 2013年06月17日発行 Vol.126
- 2013年05月15日発行 Vol.125
- 2013年04月15日発行 Vol.124
- 2013年03月15日発行 Vol.123
- 2013年02月15日発行 Vol.122
- 2013年01月15日発行 Vol.121

バックナンバー

2012年12月までに発行されたインベスライフをご購入いただけます。



購入・詳細

特集 4

自著自薦 「『投資』に偏見を抱くアナタへ 一月々500円から！ k2k2と世界中の株式への投資を楽しむ」

投信プロガー Renny

投信プロガーとして名高いRENNYさんが自著を電子出版しました。出版に秘めた思いなどについて書いていただきました。読者のみなさまにも著書を出されている方は多いと思います。自著自薦で寄稿していただければうれしいです。

[読んでみる](#)

インベスライフ応援団のブログ

あいうえお順、敬称略

紹介一覧はこちら

[伊藤宏一の「近現代日本と貯蓄」ー貯蓄は美德なのかー](#)

伊藤 宏一

[右脳インタビュー](#)

片岡 秀太郎

[実践コーポレートガバナンス研究会・ブログ](#)

門多 丈

[鎌田泰幸のブログ](#)

鎌田 泰幸

[会長 澤上篤人のレポート](#)

澤上 篤人

[世代を超える想いの滴](#)

渋谷 健

[真マネー原理](#)

滝沢 伯文

[About Money, Today](#)

竹川 美奈子

[一昨日言ブログ](#)

竹田 和平

[出口治明の提言：日本の優先順位](#)

出口 治明

[セゾン投信・社長日記](#)

中野 晴啓

[CFA流「さんない」投資塾](#)

日本CFA協会

[SRIのすすめ 未来の測り方](#)

速水 禎

[毎週3分で、資産運用の成功へ導くメルマガ！](#)

尾藤 峰男

[馬淵治好の凸凹珍道中](#)

馬淵 治好

[森本紀行はこう見る](#)

森本 紀行

参考データ・コーナー

基本ポートフォリオのパフォーマンス

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

リーマンショックがあったのが2008年9月でした。その時から約5年、たくさんの試練を受けた相場でしたが、過去5年間、株式と債券を半々で積立投資していたら投資額に対して時価は約3割上昇しています。恐るべし、積立投資。

[読んでみる](#)

投信データ・ウォッチ

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

今月は純資産上位ファンド（毎月および隔月決算型を除く）の2013年6月末の運用状況比較です。

 [読んでみる](#)

I-OWAたより

マンスリー・セミナー・レポート「驚くほど簡単な退職金運用」

講演者：岡本 和久、レポーター：川元 由喜子

退職金運用のもっとも基本的な目標は物価の上昇率に負けないリターンをあげるということです。資産運用を考える視点を「購買力」に移すと運用の方法も極めて単純化されていきます。

 [読んでみる](#)

講演：算数のできる統計データ分析入門、ミニ座談会：「生活に密着した統計学」

講演：中央大学名誉教授、統計科学研究所所長、杉山 高一、ミニ座談会：杉山 高一、馬淵 治好、岡本 和久、レポーター：川元 由喜子、赤堀 薫里

講演では身近な例をたくさん紹介しながら統計学というものの本質について語っていただきました。ミニ座談会では、馬淵 治好さんも加わり、「選挙の当確」や「テレビの視聴率」の出し方、馬淵さんの「父ちゃんの立場指数」など幅広いテーマで楽しい会話が弾みました。

 [読んでみる](#)

岡本和久のI-OWA日記

★資産運用「気づきのタネ」(101) 六つの富(ふ)とハッピー・マネー四分法③ ★資産運用「気づきのタネ」(101) 六つの富(ふ)とハッピー・マネー四分法② ★資産運用「気づきのタネ」(101) 六つの富(ふ)とハッピー・マネー四分法① ★出張授業の感想文が来ました ★今週の「うまい!」でっかい餃子 曾さんの店 ★私の寄稿、「生活者が良い企業を育てる時代」が掲載されました ★資産運用「気づきのタネ」(100) ハッピー・マネー四分法 ★瞑想三昧 ★資産運用「気づきのタネ」(99) 三本目の矢、放つのは誰?

[詳細はこちらをご覧ください。](#)



セミナー案内

マンスリー・セミナーは、個人投資家の方が、ゆたかでありあわせな人生をおくるために必要なおカネの知識を体系的に学んでいただくためのセミナーです。証券アナリスト歴15年、資産運用歴15年の岡本和久CFA®が、資産運用の理論と実践法をわかりやすく解説します。また、毎回、ゲストをお招きし、さまざまな分野の講義もしていただきます。次回は7/21(日)、その次は8/18、共に12:30~16:30@東京都渋谷区広尾1-8-6-7F(当社オフィス)で開催です。プログラムは下記サイトをご覧ください。

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

Page Top

バックナンバー | お問い合わせ | ご感想 |

Copyright © I-O Wealth Advisors, Inc. All rights reserved.



座談会:グローバル化時代の日本の課題

渋沢 健、大江 英樹、岡本 和久

岡本| 最初に渋沢さんの日本国際交流センターについて少し説明してもらえますか？

渋沢 | 日本国際交流センター(JCIE)というのは、40年ぐらい前に設立され、現在は公益財団法人として活動しています。1967年に日米関係に関する民間の会議として下田会議というのが開催されました。この会議は戦後初めて民間主導で行われた賢人会議です。その事務局に、その後、日本国際交流センターを立ち上げた山本正が務めていました。日米の議員交流の提言



を受け、その翌年、1968年に日米議員交流プログラムが開始されました。そこが日本国際交流センターの源流になっています。1970年に日本国際交流センターが設立され、1973年に日米欧委員会(現三極委員会)が設立されます。これはデイビッド・ロックフェラーの発案で、欧米の政策対話に日本も取り組むべきではないかという事で設立されたものです。背景には、冷戦があり、当時、極東にある唯一の民主主義国家であった日本を組み込まなければいけないということになったようです。日米に加えて日英、日独、日韓などの会議が発足しました。1997年のアジア金融危機を受けて、当時の小渕首相が人間の安全保障を提唱し始めていました。人間が安心して生活できるための命、人権、疾患などの安全を確保しようという運動です。その考え方にに基づき、日本も先進国として感染症の撲滅にもっと責任を持つべきではないかという事を2000年の沖縄サミットの議長国である日本を代表し、当時の森首相が途上国の開発発展を阻害する感染症対策に取り組むことは先進国の責務であると提案されました。その流れで、2002年に三大感染症であるエイズ、マラリア、結核への対策を支える資金を提供する世界基金がスイスに設立されました。先進国政府からお金を拠出してもらい、それをアフリカとかアジアの現場で活動している方々に提供



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

する。このような運動を続けている国際金融機関です。今年の5月31日はアフリカ開発会議(TICADV)のパートナー事業として「アフリカ経済成長の鍵～健康への投資」という国際シンポジウムを開催したり、本会議の公式サイドイベントも運営企画しました。今、ご説明したように、かなり幅広い活動をしていて、背景を知らない方にはちょっとつかみどころのない組織かもしれません。日本国際交流センターの名刺をお渡しすると「留学生の交流プログラムをしているのですか」などと聞かれます(笑)。

岡本 | ある意味、公的な部門と民間の部門の接点に立っていて、両者の交流がうまく行くような働きをしているような印象を持ちました。

渋沢 | まさにおっしゃるとおりで、非営利、非政府である方が自由な立場として、行政や政治の下にあるのとは違った活動ができます。シンクタンクではなく、シンクネットワークのような感じですね。いろいろな考えをつなげるということですね。山本正は私の母方の叔父であったのですが、残念ながら病になり、後任を頼まれました。2011年の最後の週でした。ご承知のとおり、私はコモンズ投信など色々な活動に取り組んでいるので、難しいと思いましたが、お互い一年ぐらいかけて考えようことになりました。ところが年が明けて直ぐに入院、4月に逝去してしまっただけです。長年、民間外交の実績を築き上げてきた組織がなくなってしまふのも日本にとっては大きなダメージを与えるということにはわかっていましたし、周囲の関係者から強い要望もあったので、その時点で「まあ、何ができるかわからないけれど」ということで2012年の6月に就任させてもらいました。

岡本 | 各国に同じような組織があるのですか

渋沢 | JCIE という看板で事業をしているのはニューヨークだけです。ただ、各国とも同じようなことをしている組織がたくさんあり、それらと連携をしています。

岡本 | グローバルな活動をしていく上で何か難しさとか困難を感じることはありませんか

渋沢 | そうですね。これは日本だけの問題ではないと思うのですが、このような関係を築いたのが前の世代の方々だということです。次の世代である我々に前の世代と同じような関係があるかという、日米の場合だと日本の政府が頻繁に変わるなど信頼関係が損なわれました。現在は、今はいい感じで再構築をしている感触がありますが。前の世代だと、日本が元気だった時代を生きてこられたの方々ですから、ソニーの盛田さんとか世界的に視野が広い現役の経営者が民間セクターから見た知的交流が必要だと言うことで、JCIEの活動を支援したり、会合に参加してくださいました。失われた20年といいます、何が失われたかと言うと、そのような経営者の方々が失われたといえるかもしれません。例えばソニーの盛田さんはベンチャーを立ち上げた人じゃないですか。ものすごく当事者意識があった。それが次



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の世代になると、優秀な方であることは間違いないですが、どちらかというサラリーマン社長になってしまう。そうすると、会社の仕事の一環としてこのような世界課題に取り組む活動がどうなのかと考えるようになります。ある意味で、狭い範囲のガバナンスに縛られてしまい、本業とは直接関係性が見えない活動に参加することを控える傾向があったと思うんですね。しかし、21世紀に日本が繁栄するには経済界のリーダーたちに世界的視野を持っていただくことは明らかなです。日本、そして、世界の経済社会の当事者、ステークホルダーとして、政策立案に関係する政治家の方々とも、学者とも、このような分野についてしっかり考え、参加していただきたいと思います。過去20年ぐらいの間に、そのような視点で行動をしてこられた方は減少したので、再復活することは急務です。

岡本 | ある意味、ひと口に「国際化」と言っても、インターナショナル化がグローバル化に変わっていくというプロセスが十分に認識されていないのではないのでしょうか。企業にしても国民にしてもですね。結局、日本という国に相対するものとして、ひとまとめにした外国と言うものの区分で物事を考えるのではなく、日本も含めた世界という発想が必要になってきている。日本の過去20年間はどちらかと言うと国内の問題が大きすぎ、内向きな思考が強まった時期ではないかと思えます。その点でグローバル化を前提にしたJCIEの活動などがもう一つ力が入りにくかったという事はあるのかもしれませんがね。1960年代には日本は「先進諸国に追いつきたい」ということで必死に海外に輸出をした。1970年代にオイルショックがあったものの、省エネや合理化で乗り切り、国際競争力をつけた。70年代後半、80年代には本格的な輸出大国になり、世界最大の債権大国にまでなった。日本のバブルが崩壊するのとほぼ時を同じくして、冷戦構造が集結し、グローバル化の波が世界を被った。しかし、日本については国内問題があまりに大きく、多くの企業はグローバルな視点を持つ余裕がなかったのではないのでしょうか。最近の10年ぐらいを考えれば、中国という存在が非常に大きくなり、日本企業も海外に工場を移転したりして、グローバルなプラス面、マイナス面が現れるようになってきている。しかし、相変わらず日本のメンタリティーはどちらかと言うと、内と外を厳格に区分する傾向がある。今、日本の企業にも個人にも求められていることはグローバルな意識の広がりではないかと思えますね。TPPという新しい課題も起こってきています。日本人の特性である内と外との区別が困難になるに伴って、何か日本人の心の中が落ち着かないような気がしています

渋沢 | TPPはいい例だと思います。国際化ということだと、それは日本対世界というイメージです。グローバル化と言うときは、日本が世界の一員としてどのように振る舞うかということが問われているわけです。日本の位置づけの問題ですね。TPPはいろいろな側面があるとは思いますが、でも、これが「アメリカの陰謀である」などと言う人もいるけれども、それは本当に「どうかな」と思います。小説としては面白いかもしれませんがね。私は環太平洋という、世界で最も重要な地域の戦略的なルール・メイキングの話だと考えています。日本はそこで



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

どうするのですか。当然、そのルール・メイキングのプロセスに参加して、ときにはガチンコになるかもしれないけれども、議論に参加していくことが絶対に必要だと思います。

岡本 | 基本的に日本人は欧米的な議論に弱いというのを日本人自身がよく知っていて、議論に参加したら負けるということを自ら認めているような感じもしますね(笑)。だから、参加したくないという…(笑)。

大江 | それは現実的かもしれないけれど、何か寂しいですよ(笑)。議論が個別論になってしまっていて大局的な視点が失われている様な気がします。



岡本 | 何かあると、「こんなに犠牲になっている人がいる」、「こんなにかわいそうな人がいる」という事ばかりマスコミも報じる。「かわいそうだからなんとかしろ」と言うことが何か社会的な正義感につながっているような気がする。例えば沖縄の問題にしても、「沖縄はこんなに犠牲になっている」という議論と日本の防衛をどう考えるかという議論が交じり合っ
てしまっている。しかし、現実には「沖縄がかわいそうだから日本の防衛を手薄にしろ」という議論は通らないでしょう。何か、部分最適ばかりで、全体最適が行われていないような気がして仕方ないのです

大江 | 同じことが、企業経営にもいえます。先ほどのインターナショナルリゼーションからグローバルリゼーションへの変化という話に関係しますが、今は多くの日本企業もグローバル化しています。しかし、それは日本に本社があり、海外に支社があり、本社が支社をコントロールして成り立っているというのが現実です。本当はグローバルにすべての事業活動が最適化されることが重要で、たまたま、それが一番良いことなら本部を日本に置けばよいのです。そのような発想が今まであまりなかった。

渋沢 | 確かに20年前と比べれば少しはそのような企業も出てきているのは事実ですが、それはゼロが一になった程度で、現実にはほとんどその様にはなっていないと言えるでしょうね(笑)。先日、30年ぐらい続いている日英の政策会議で初めて「ガバナンスと21世紀資本主義」というテーマが取り上げられました。その中で、イギリス人から見ると、日本のコーポ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

レートガバナンスについて、オリンパスのウッドフォード元社長の解任などが非常に強い印象として残っている。つまり、日本はコーポレートガバナンスがなっていない、というのが一般常識です。確かになっていない会社もたくさんある。しかし、現実にはオリンパスの場合、問題が表面化し、ある意味で、ガバナンスがうまく機能したともいえます。あれはある意味、日本のガバナンスの歴史の中で重要な事件だったといえます

岡本 | あの事件は確かにガバナンスがうまく機能して問題が表面化しました。しかし、だから外人の役員などを入れると面倒なことになると思う企業も一面で増えたといえます(笑)。

渋沢 | それもいえますよね。

岡本 | これ、今後、変わっていきますかね

渋沢 | ぼくは変わっていくと思っています。時代の流れで抵抗勢力があるのも事実ですが、時代の潮流には変えられない。

岡本 | ある意味、人類がこの地球上に誕生して以来、ずっと続いている潮流はグローバル化だともいえます。アフリカで人類が発生して以来、その活動範囲はどんどん地球全体を覆うようになってきているわけですからね。人類全体のそのような活動の拡大は個人の活動の輪を広げることにつながっています。

渋沢 | グローバリゼーションの一つの考え方は、全世界で一つのルールを決めましょうということです。グローバル・スタンダードという一つの物差しで計ったほうが効率がいいので。しかし、それが本当のグローバル化かと言ったら、そうではないと思う。キーワードは「多様性」です。いろいろな民族とか価値観の人が集まり、多様性を持って価値創造ができるというのが本当の意味のグローバル化ではないかと思えます。その意味では一つのルールではなく、共通の目線を持つプリンシパル、つまり、同じ土台に立つということが大切なのではないかと思えます。「人間として当たり前のことは大切にしましょうね」と言うような事ですね。宗教の違いを超えて、人のものは盗んではいけない。人を殺してはいけないなど共通の倫理観がありますよね。当たり前のことですね。そういうところをベースにすることが必要なんじゃないかと思うのですね。

岡本 | グローバリゼーションというのはコンピューターのOSを共通化するということで、アプリケーションは各国ごとに異なっていていいのだということを聞いたことがあります。まさにそういうことですね。基本的な理念というか考え方、価値観は全世界で共有しましょう、例えば人権の問題だとか、自由の問題とか、平和とか、そういう土台があって、そこから上はそれぞれの国ごとに独自のものがあっていい。だいたい多様性がなければ面白くない(笑)。そ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の点で私が非常に面白いと思うのは、明治時代の廃藩置県です。江戸時代の多くの人にとって、まさに自分の藩こそ自分の国だった。それぞれの藩で独自の文化や生活があった。それがある日突然、これからは、「日本が国だ」ということになった。中央集権的な政府のもとに藩が県として再編成された。しかし、各地方の文化や生活は、もちろん相互間の影響度は高まってきているとは思いますが、きちんと伝承されている部分も多い。同じことが、いま世界的に起こればいいのですけれどね。

渋沢 | そこは逆に日本だからできたということもあるのかもしれない。何かが決まると結構素直にそれに従う。それもあってではないか、と思いますね。日本人は同質的だと言いますが、かなり地方ごとに大きな違いもあるし、必ずしも一概に同質とは言えないのではないかと考えています。

岡本 | その意味で言えば、多様性は非常に強く残っている、またそれを大切にしようとしている。東北の人と九州の人、江戸っ子と浪花っ子では文化も、食べ物も、考え方も、言葉も相当の違いがある。でも「あなたは何人ですか」と聞かれれば、みんな迷いなく、「日本人です」と答える。この小さい国で方言がいくつあるかと言えば、大変な数がある。このような多様性を残しながら日本という統一国家が出来上がった。これは明治のひとつの偉業ではないかと思います。

大江 | そうですね。明治維新もそうだし、太平洋戦争の後もそうだったけれども、普段は何もそのようなことを意識しないのですが、例えば天皇家とか天皇というものがなんとなく共通のよどころとしてあったのではないかと思います。あれだけ混乱した明治維新であっても、最後にうまくまとまって行ったのは、そのような共通の価値観というか、拠って立つものがあつたところによるのではないのでしょうか。

渋沢 | 明治維新の時はなんといっても危機感があつたと思うんですよ。このままいったらバラバラになってしまうか、あるいは海外から攻められて植民地になってしまう。そのような危機感があつたでしょう。

岡本 | 戦後もそうだったかもしれない。

渋沢 | それが現在はいろいろまずい事はたくさん起こっているにしても危機感にまでなっていないのではないのでしょうか。

岡本 | それに少し近かったのが、多分、1973年のオイルショックの時だったのではないのでしょうか。石油の輸入が途絶えるなど誰も考えていなかったのが、突如としてその危機が発生した。本当に石油の輸入がストップしたら日本はどうなるか。あの時の危機感というのは大変な



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ものだったと思います。そして、ある意味、それがバネになって日本企業の国際競争力につながったし、官民が一体になってそれを乗り越える努力を必死に行った。とにかくみんなで努力をして国、企業、個人の生活を守ろうとした。ただ、その時でも日本人の発想の中では「日本を守る」というところにとどまっていた。まあ、余裕がなかったと言うことも事実でしょうがその辺の限界が、今このグローバル化の時代において表面化してきている部分はあると思います。

渋沢 | そうなんですよね。そこのところですよ。例えば、伝統的な安全保障ということを考えると、国という単位で見て国境を守ることが前提になっているじゃないですか。それは、ある時代はそうだったかもしれないけれど、今ですと、例えばアルジェリアにあった日本のプラントがテロに襲われるとか、あるいはサイバーの世界ですと、サーバーがどこにあるか全然わからない中で、いろいろなことができるわけですよ。だから、国境ということにこだわると、どうしても限界が出てしまう。日本人の安全保障とはなんだろうということを考えると、国境だけを守れば良いという事では無い。僕は結構、このような国境とは別の垣根が大きな意味を持っていると考えています。その垣根をどのように超えられるかということが、今世紀において価値を作れるかどうかのカギだと思います。日本はどちらかという境目が好きです。内と外と分けたがる「うちはこうなんだよね」というような話し方をいつもする。

岡本 | 土井健郎先生の「甘えの構造」などでもその点は指摘されていますね。日本人の性癖として内と外とを分けたがる。家に入るときは靴を脱ぐ。関西に行けば自分の事を「うち」と言う。東京だって自分の会社を「うちの会社」と普通に言いますよね。やはり、外は何が起こるか分からない、とても危ない恐ろしいところだ。だから、できるだけ近寄らない方が良い。観光でちょっと行ったり、短期の語学留学で行って帰ってくるのはいいけれども(笑)。反対に「うち」は安らげるところであって、甘えが通用する場所である。そのような気風は間違いなくありますよね。

渋沢 | やはり日本人のDNAとしてどこかに甘えたいという気持ちはあるから、それを全面的に否定するのは難しい。けれど、内側だけにとらわれていると、枠がどんどん小さくなってしま

岡本 | アメリカ人だって「Nice to be back home」で故郷に戻るのはとても良いこと、嬉しいことだと思っている。しかし、それは個人としての世界なのですよ。日本の場合には、日本全体がホームになってしまっている。そして戻って嬉しいのではなく、そこから出て行きたがらないというところに問題があるように思います。これは企業という面でもそうだし、何か集団が中心軸に強く惹き付けられている感じがします。

渋沢 | コモンズ投信で全国各地を草食隊として回っていますが、地方の方は好奇心も強いし、お金もちゃんと持っている。だけど投資ということになると、自分の子供たちも東京に行ってし



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

まうし、その上、自分のお金まで東京とか、外国に入ってしまうのか、自分の手元から離れてしまう、と言う抵抗感が強いように思います。でも投資というのは逆だと思っていて、世界とか地域以外の成長をその中に取り込んでくる手段だと思っています。そのようなお話をするときょとんとした顔をされている。二、三回話すと「そういう考え方もありますね」と理解して下さる。なんとか銀行の地元の支店や、信用金庫などはお金が手元にあるから安心というようなイメージがある。

岡本 | 直販投信も初期の時代には「おらが街投信」などと言う呼び方をしていました。そこで多くの方が、この投信はおらが街で資金を集めて、おらが街に投資をしてくれるものだと勘違いしてしまっただけで、でも「ここは経済的に非常に停滞をしている。だから、経済の成長している海外や日本の中の他の地域に投資をして、その成長の成果を地元に戻ってくる必要がある。その手段が投資なのだ」というお話を何度もしたことがあります。その結果、海外で運用して得た収益が、地元に戻ってきて地元が元気になるという構図なのです。そのことを勘違いしている方が非常に多かったように思います。同じ事は地元が日本という国の単位に広がったとしてもいえます。その結果が、強いホーム・カントリー・バイアスになっているのだと思います。

渋沢 | 日本の地方で、豊かな自然があり、おいしい食べ物がたくさんあり、そこに居ながらにして世界の成長の成果を取り込んで生活するなんて、こんなに素晴らしいことは無いだろうと思うんですけどね(笑)。

大江 | 本当にそうですよね。

岡本 | 先ほど部分最適か、全体最適かという話が出ましたが、現在の日本を考えると、日本最適にしがみつすぎているような気がします。本来、グローバル最適があつて、その中で日本最適というものがあるべきではないかなと思うのです。グローバル化が進んだ今日、日本から発想が始まるのではなく、グローバルな発想の中で日本の独自性をいかに生かしていくかということが必要なのではないのでしょうかね。

渋沢 | 日本のような海洋国家、海に囲まれている国で日本の恵(めぐみ)の多くは黒潮に乗ってきている。その意味では、世界の中で循環している富の恩恵を受けている。だから、もっとグローバルな視野が開けてもいいと思うのですが、逆に言うと、何もしなくても恵がやってくる。だから外に出て行く必要はないと言う発想もあるのかもしれない。

岡本 | それは大変面白い視点です。いろいろな意味で日本という国とは非常に恵まれた環境にあります。海洋資源だけではなく、明確な四季に恵まれている、それぞれの季節でお祭りがあり、みんなで楽しむ。穀物などの農作物も豊かに育つ。日本はとにかく恵まれている。冬



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

が来たってじっと耐えていれば必ず春がやってくる。その意識があるから、仮に何か問題が起こっても、とにかくじっと耐える、我慢する、時を稼いでいればそのうち良くなるという考え方は我々の DNA に浸み込んでいるような気がします。

大江 | いくら問題があっても「水に流す」というような考え方もありますよね。

渋沢 | そうそう、僕は結構、「水」がポイントだと思っています。よく狩猟民族か、農耕民族という分けかたをしますよね。でも考えてみれば、人間の文明のすべては農耕から始まったと言えるのではないのでしょうか。だけど、大陸の農耕民族と、日本の農耕民族との大きな違いは、水ではないか、と思うのです。日本は水が豊かなのです。海の水が蒸発をして、日本の中央を走る山脈にぶつかり、そこからきれいな水となって日本の国土に降り注ぐ。だから、ちょっと我慢すれば、きれいな水が流れてくる。嫌なことがあっても水に流してしまうことができる。そこから何か日本人の特性というのが説明できる気がします。そして、それが日本人の宗教観にもつながってくる。他の国だと、常に下流の国と、上流の国では水をめぐる戦いが起こる。人間にとって絶対に必要な水を、どのように確保するかというのが死活問題になっている国は非常に多い。その意味では、いかに自然を制覇するかというのが生活の基本になっているし、宗教観にも影響を及ぼしていると思います。日本の宗教は恵まれた環境を前提にしているように思う。

大江 | 農耕の前に採取が中心だった時代があります。ドングリを拾ったりしてね。中国や何かだと、そういうものを取り尽くしてしまうのですね。無くなるまで取り潰して無くなったら他所へ行く。日本の場合には、「ほどほど」ということを知っている。「これ以上は取らない方がいいよね」、とか、「ここまで取ったら後は置いておこう」とか、そのような自分をコントロールすることを知っていたような気がします。

岡本 | 確かに日本の場合には、取り尽くしてしまっても移動していく場所があまりないですからね。砂漠のように、いくら探してもドングリなど落ちていないような土地に生活をしている人の生活様式と、日本人の生活様式はかなり違うし、それが考え方や宗教観の違いとなって表れていると言えるでしょう。やはり砂漠の地域から始まっている宗教というのはどちらかというところ、戦闘的、ある意味、ゼロサムを前提にしている。その結果、自分が何かを得るためには奪い取るが必要になる。日本は環境としてプラスサムの世界があって、その中でうまく調和を保っていれば、うまくいくということを何千年間の体験で知っている。

渋沢 | 面白いと思うのは、我々が神社に行って鈴を鳴らします。そして二拍手をする。あれは神様を起こしているのです。それを考えると、日本人の宗教観というのは、「神様オンデマンド」なんです(笑)。鈴を鳴らすとやおよろずの神が、「じゃあ私が行くよ」と言って願い事を聞いてくれる。一神教では一人の神様しかいなくて、この世でちゃんとした行いをしないと天



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

国に行けない。地獄に落ちてしまう。そこには時間軸があります。日本人の頭の中は四季の巡りはあっても、あまり時間軸がないように感じるのです。お祭りも山から神様を呼ぶ儀式です。お祭りが終われば神様は元の山に戻る。投資についても、何か日本人は時間軸の意識が希薄な気がします。時間というものにも何か心理的な境がある。

岡本 | それは大変面白いです。一方で日本人には「永代」というような意識もある。これは個としての命を超えた代々つながる時間感覚です。同時に、農耕民族として定期的に収穫をしなければ労働の成果は何も得られないという意識も強い。年に1回、半年に1回、3カ月に1回、そして毎月分配型の投資信託は非常に人気になる(笑)。とにかく、成果を手にして初めて安心をする。それがすごくあるように思いますね。元本を再投資して大きく増やすと言うところに何か不安感を持つ人が多い。何十年後かの成果のために今何かを言うのは、農耕というよりはむしろ林業に近いのかもしれない。

渋沢 | そうかも知れないですね。日本人の強さというのは、いろいろな矛盾をうまく取り込むところにあるのかもしれない。自然を愛しながら、自然を破壊する。ある意味、矛盾から価値を創造している。その一番いい例がカレーうどんだと思っています。カレーの文化と中国の麺の文化を合体して、日本の出汁を加えて美味しいものを作っている。よく考えればかなり無茶苦茶なことをしている(笑)。日本人は多様性をあまりに簡単に取り入れすぎているので、逆に多様性がないと思われているのかもしれない。

岡本 | やはり日本はユーラシア大陸の辺境地帯にあるということから、常に上位の文化は外から来ていた。そして入ってきたものを自分たちに使いやすいように工夫する。仏教が入ってくれば、神道と集合してしまう。漢字が入ってくれば、ひらがな、カタカナを作る。アンパンだってすき焼きだって、明太子スパゲティだって、みなフュージョンで出来上がった産物です。外の文化を



内に取り入れ、それを国産化することで、国内の競争で優位に立つという図式があるのではないのでしょうか。最近の制度面でもやたらに「日本版ナニナニ」というのが多い。面白いのはそのようにフュージョンで出来上がったものが、今グローバル化した世界の中で評価されはじめているということです。ジャパン・クールという言葉に代表されるようにね。「ココイチのカレーライスが好きだ」と言うインド人に何人も会いました。「インドのカレーとは違うけれどおいしい」と言うのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

大江 | 味千ラーメンだって世界中に広まっていますよね。

岡本 | そうですね。麺文化はずっと古いのですが、ラーメンということになると、江戸の末期に西洋人が中国人の通訳を連れて日本を訪問するようになってきた。その通訳たちが港のあるところに中華街を作り、そこで中華麺を出す店を開店した。ただ、日本人にはスープが獣臭くて浸透しなかった。そこでしょうゆ味・鰹ダシというような和風化が行われ、日本全土にそれが広まるようになった。そして、非常に多くのバリエーションが生まれてきた事はご存知の通りです。その日本のラーメンが、即席めん、カップめんによって全世界に驚くほどの普及をし、さらにその流れの中で、現地に進出するラーメン屋さんが増えてきている。さらには外国の地元の人たちが独自のラーメン屋さんを作るケースもたくさんあります。これは1つのグローバル化のモデルとしてとても面白い教訓を含んでいると思います。考えてみれば、日本の輸出の中心であった自動車にしろ、テレビなどにしろ、もともとの発明は海外です。それを日本で生産をすることで品質を高め、使いやすいものにした。それを輸出していくうちに、海外で評価され、さらに現地生産が進展していったわけです。ラーメンの普及も同じようなことが起こっています。

渋沢 | 海外からいろいろなものを取り込み、それをオリジナル化することで価値を生み出しているじゃないですか。

岡本 | もっと自信を持って日本のオリジナルなもの、あるいは海外から取り入れてオリジナル化したものを世界に浸透させていってもいいのだろうと思いますね。少しグローバル化に向けての教育という点について少し話をしませんか。

渋沢 | 金融経済でも、外交安全保障でも、色々な分野の会議で、結局、教育がテーマになる場合が多いです。日本人の若者はどんどん内向きになっているというのが基本的な問題点です。まあ、統計的にどれくらい信頼性があるかというのも少し問題はあります。留学生が減っているといっても、若い人の数そのものが減っているという要因もあるでしょう。だけど、僕のところに来る若者たちってとても凄いですよ。僕の20代の頃よりもはるかにすごい。考えもしなかったことをどんどん行動に移している人たちもたくさんいます。それは、彼らの世代で平均的な存在ではないかもしれない。しかし、そのような人材がいるということも事実です。従って我々の世代として、しなければいけないのは若者全体の底上げということもあるのですが、一方でこのように先端的な青年たちをどんどん世界に向けてチャレンジさせるということではないかと思います。これまでの日本だと、そのような行動をとる若者をむしろ抑え込もうとするような傾向があったように思います。でも、もっと暖かく「自分の知らない世界にチャレンジするんだから頑張れよ」と言う大人はもっと増えてもいいと思います。応援をするということですね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | 一般論で言えば、非常に大きな障壁が言葉の問題でしょう。東南アジア諸国から来る人たちなど、日本語をマスターする期間が非常に短いのに驚かされます。日本の場合には、かなり長い時間をかけて英語勉強し、さらに、小学校でも教えるというような話ですが、その割にはちっとも現実に英語でコミュニケーションできる人が非常に少ない。何なのでしょうねこれは。教え方の問題でしょうか。

渋沢 | まあ教え方の問題もあるでしょう。また、年齢的なスイートスポットという問題もあると思います。何歳から何歳位の間が一番語学を学ぶのに適していると言う時期があるように思います。その時期を外すと効果が減るということでしょう。僕の場合は、小学校2年でアメリカに行き、一言も英語が喋れないで、現地の小学校に放り込まれた。最初の二年ぐらいは想像の世界でした。でも、子どもの世界ってサバイバルしないとイケないので、だんだんしゃべれるようになる。二年ぐら経ってしゃべれるようになったように記憶しています。やればできるのです。日本人だからできないという事は無い。遺伝子的な問題があるわけでは無いのです。まあ、機会と環境が与えられていない、というのが大きな問題ではないでしょうか。

岡本 | 私も18歳で、1965年にアメリカの大学に入りましたが、最初はまったく何もわからなかったです。何をやっているかも十分わからなかった。まさに想像の世界。特に哲学史が必修科目だったのですが、これは絶望的でした(笑)。先生は「トートル、トートル」と言っているのだけど、全然わからない。「タートル(亀)かな、でもこんなところに亀が出てくるはずがない」と不思議に思っていました(笑)。ある時、ようやくわかったのは、トートルというのはアリストテレスのことだったのです。英語ではアリストートルというのですね。しかも、早口だったので、アリスが聞こえなかったのです。そんな経験の連続でしたよ。でも、渡米して10ヶ月ぐら経った頃から少しずつわかるような気がしてきました。やはり文法を重視しすぎて、それでマルか、バツを決める方式だと、どうしても限界があるように思います。動詞の三人称単数現在形では「s」をつけると教えられます。ですから、試験で「He go to school」と書いたら×になる。しかし、実際の会話だったらこれで十分に通じる。もちろん、良い英語にするためには、きちんと「He goes to school」と言わなければいけない。でも実践の場では、この程度の間違いは問題ないのです。

渋沢 | そうですね。でも日本の教育って、まあ、日本だけじゃないかもしれないですけども、正しい答えを出すことを目的とするじゃないですか。でも21世紀のグローバル化に対応するのに必要なのは、正しいひとつの答えがない中で、何を選択していくかということが求められているのです。多様性が豊かになる選択肢はいくらでもある。限られた選択肢の中でどれを選ぶかということよりも、可能性の中で一番最適に近そうなものを選び続けていくという能力ではないかと思います。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | O×とか、4択の場合は答えが与えられているではないですか。与えられた答えの中で選ぶ。DCプランのメニューのようなものです(笑)。そうすると正解はひとつなのです。残りは×になってしまう。そうするとDCの場合でも選択肢の中で「どれが一番儲かるんですか」ということで、一番、儲かりそうなところに全額投資してしまう。そのような傾向もあるのではないのでしょうか。

渋沢 | 長期投資家はそのような傾向は少ないとは思いますが、似たようなことは、やはりありますよね。専門家に聞けば何を買ったら儲かるか正しい答えが分かると思っている。

岡本 | やはり、もう少し子供の時から答えを考え出すという習慣をつけさせる必要がある。子供は大人が想像する以上に理解力も判断力も高い。その時期にどれが正解かを選ぶテクニックばかりを学ばせてももったいない。

渋沢 | それはおそらくサプライサイドの問題もあって、どちらの方が教えやすいかというと、O×にした方が点数をつけやすいですからね。論文形式で答えを書かせた時、採点は非常に難しい。

岡本 | 極論ですが、いっそ点数をつけるのを止めたらどうなのでしょう。意見を行ってもらおうというので十分でしょう。考える力を養っているのですから、その答えが合っているかどうかというのは、二の次の問題です。せつかく子供の数が減ってきているのだから、従来とは違った、手が掛かっても本当に子供の能力を引き出せる教育のあり方を考えるべきだろうと思えますね。

渋沢 | それはおそらく幼稚園ぐらいからやらないといけないでしょうね。正しい答えを選ぶ教育に慣れてしまうと急にケースメソッドと言っても難しい。

岡本 | 日本にとっての大きな課題ですね。ただ、今の若い人って本当に優秀ですよ。

渋沢 | 10年前と比べて明らかに変わったなと思うのは、非営利の分野に興味を持つ若者が増えたことです。20年、30年前は、世界のために、日本のためにという高い志を持って一生懸命働く人がいらっやっったんですね。でも、その世界しか知らない人が多かった。最近の10年とか5年ぐらいを見ていると、「ゴールドマンで働いていました」、あるいは「マッケンジーで働いていました」、「博報堂でした」などと言う、常識的にはそれだけで十分、物質的な満足を得られるような職についていた人がNPO法人にやってくるようになった。自分が本当にやりたい事をやりたいということで、非営利団体に来るようになってきたのです。社会事



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

業や教育事業を立ち上げる人も出てきている。そういうリスク・テイクをしている人たちを見ると、何かとても気持ちがすがすがしくなって、頑張してほしいと思う。

岡本 | 最近の若い子供は本当に抵抗なく、NPO 法人などに普通の会社に就職するような感じで就職をしている。まあ、ある意味、全体的に豊かになってきているので、それほどガリガリ働かなくても、自分で「意義を感じられる仕事をしたい」という人が増えているのでしょう。大金持ちになるよりも、自分の中での満足感を得ることの方を優先するようになってきているのではないのでしょうか。雇用の問題が色々言われていますが、NPO 法人はもっともっと増えていけば、かなり雇用の受け皿としては大きなものになるだろうと思います。



渋沢 | NPO のことを「non revenue organization(非収入組織)」って思っている人がいるけれど、それは絶対に違うんですね(笑)。収入は必要だし、またその利益をどのように再配分していくかということも重要です。

岡本 | 私の会社は株式会社だけれど、NPO、ただ「Non Profit Organization(非営利組織)」ではなくて「No Profit Organization(利益なし組織)」です(笑)。

大江 | さっき渋沢さんおっしゃったように本当に、そうそうたる履歴と優秀な能力を持った人がNPO などをやったりしてるのが結構多いですね。私の知り合いでも、電通でトップの成績をあげていた人が名古屋に帰ってきてJAを通さない農業の活動をしている。普通、JAだと、生産調整をして余った農作物を捨ててしまうのだけれど、JAを通さず、障害を持った子供たちのところにそれを持って行って、その野菜を加工して販売することで自活していくことができるようにする。そのような志を持ってやっている人がいます。

渋沢 | 僕も非営利の関係の仕事は30年ぐらい間接的、非間接的にやってきましたが、今までそのような事はなかった。

岡本 | そのような事はお上の仕事であって、民間がすることではないと思っていた



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

渋沢 | 最近、若者の間でライスワークとライフワークという事を言うようになってきている。ライスワークと言うのは文字通りお米のため、食うための仕事、ライフワークというのは、自分の志を満たすための仕事と分けているようですね。昔はある意味、それらが一致していた。なぜなら自分が食うために働くと、その結果として自分の生活が向上していった。そして社会も良くなっていくことが実感できた。しかし、今は豊かになってしまっていて、いくら自分が頑張ってみても、世の中の豊かさがそれほど増加しているという実感がない。そこで彼らはそのような仕事はライスワークだと位置づける。

岡本 | まあ最終的にはライスワークとライフワークは合体していくというのが望ましいのでしょうか

大江 | 「ナイスワーク」ですね(笑)。

岡本 | 社会に貢献するという意味で言えば、実にこの数十年にわたって「貯蓄から投資へ」ということが言われ続けています。しかし考えてみれば、これは安全なことから危険なことをやれと言っているの、なかなか受け入れがたい人が多いのではないかと、思っています。事実、掛け声の割にはちっとも貯蓄から投資の動きというのは起こってきていません。私はむしろ貯蓄から投資へと言うよりは、寄付から投資へと言う考え方の方が投資の本質に近いし、また普通の生活者も受け入れやすいのではないかと思います。というのは寄付というのは金銭的な見返りがないけれども、自分の行為が人の役に立ったという意味での満足感を得ることができます。ある意味、利他の喜びというリターンがあると言ってもいいと思います。所詮、金銭的なリターンがあったとしても、金銭のままでは何の喜びも生まれません。それを満足感とか幸福感に変換する必要がある。その方法としては、例えば買い物もあるかもしれないし、寄付もあるかもしれない。投資というのは、今すぐ必要としないお金を、今すぐお金を必要とする人に用立ててあげ、その人がそのお金を活用して、ビジネスを通じて良い社会作りに貢献する。そして、世の中からの感謝を受けてそのビジネスは大きく成長をし、その利益の一部がお金を用立ててあげた人のもとに戻ってくるというものです。その意味では投資によって、自分のお金が世の中の役に立つという喜びを味わうことができ、さらにその上で投資の収益ももらえる。そうなれば、こんなに嬉しい事は無い。むしろそのような考え方の方が寄付文化も投資文化もずっと浸透するのではないかと最近思っています。

渋沢 | いや、それはおっしゃる通りです。私も寄付というのは単なる人道的支援という事だけではなく、超長期投資であると考えています。リターンは、自分自身に戻ってこないかもしれないけれど、また、自分の子供や孫に良い世の中を残してあげるという喜びを得ることもできる。

岡本 | 私はそれを「超マネー投資」と呼んでいます。「喜びのリターン」を得るということです。お金って結局、喜びに変換しなければ何の価値もないものです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

大江 | それはそうですね。

岡本 | 何かそのような発想の転換をしないと、貯蓄から投資へと言う言葉を聞くたびに何か銀行とか証券の売り込みのイメージになってしまう(笑)。

渋沢 | 新しい証券会社の中には、通常の証券投資の他にマイクロファイナンスや寄付などもできるようなクラウドファイナンスの仕組みを組み込む事を金融庁と交渉しているところもあるように聞いています。

岡本 | 銀行さんに預金をして、銀行さんがそのお金を自分の選んだ貸出先に融資をするという間接金融ではなく、投資家自らが株式や債券など投資先を選択する直接金融によって、自分の気持ちを込めたお金の活用の仕方ができるのと同じように、寄付についても大きな団体に寄付をすれば、その資金がどこに行ってしまうのかわからない。しかし、自分の気持ちをお金に込めて、どこに使って欲しいかと言う意思表示ができるような「直接寄付」ともいえるような仕組みがもっと幅広く出現して欲しいものです。今日はグローバル化と日本の課題そしてお金、投資、寄付など、非常に幅広いお話を伺うことができ、とても充実した座談会ができました。渋沢さん、大江さん、どうもありがとうございました。



中国がわかるシリーズ 10 漢帝国の盛世と武帝の時代(後)

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO 出口 治明

ところで、匈奴の専横を苦々しく思っていた武帝は、BC139年、張騫を、匈奴によって西方に追われた大月氏に派遣し、匈奴を挟み撃ちにしようと考えました。武帝が没するまで約50年近く打ち続くことになる対匈奴大戦争の始まりです。しかし、大月氏は、西方に安住し、匈奴に対する復讐心を失っていました。張騫は、目的を達することは出来ませんでした。13年目に帰国し、西域への道が開かれました。19世紀の地理学者、リヒトホーフエンが命名したシルクロードの誕生です(もっとも、太古からユーラシアの東西を結ぶ道は存在していました。張騫以降、国家がこの道を管理し始めたのです)。漢は、高祖以来、匈奴の属国的なスタンスを保ち、平和外交を旨として、目立った外征を行いませんでしたので、国力は回復し、国庫が豊かになっていました。

満を持した武帝は、衛皇后の弟、衛青や、甥、霍去病を将軍として、何度も匈奴を撃たせ、BC121年、終に匈奴の渾邪王は、漢に降りました。ここに、匈奴と漢の国際関係は、主従が完全に逆転したのです。武帝は、大宛(フェルガーナ)にも軍を送り、待望の汗血馬を得ました。しかし、度重なる大規模な外征は、国力を蝕み、財政を逼迫させましたので、武帝は、経済官僚、桑弘羊を抜擢して、BC119年には塩鉄専売制を始め、BC115年には、均輸法(税の物納に商人を介在させず中間マージンを節約)により、歳入増を図りました。また、武帝は、BC118年に、貨幣改革を行い、これまでの半両銭に代えて五銖銭を発行し、租税(基本は人頭税)もすべて五銖銭で収納するシステムを導入したので、貨幣経済は全国に行渡りました(五銖銭は、安定通貨として、隋の時代まで通用することになります)。

匈奴を撃った武帝は、BC113年、初めて巡行に出発、BC111年には、南越を滅ぼし、ベトナム北部から中部にかけて3郡を置きました。南越に拠っていた夜郎(貴州の地方政権、夜郎自大、という言葉で有名です)なども漢に服属し、ベトナム中北部から雲南までを領有した漢は、東南アジア貿易に直接乗り出すことになりました。

当時は国際通貨である金が豊富に産出し、特産物である絹織物がありましたので、対外交易は容易でした。BC108年には、衛氏朝鮮(伝説の箕氏朝鮮の次の王朝。BC194年、燕人、衛満が平壤近辺に建国)を滅ぼし、楽浪郡など4郡を設置しました(その後、楽浪郡は、400年余り継続し



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ます)。武帝の時代、特にその前半は、中国の古代帝国の極盛期と言ってよいでしょう。武帝は始皇帝を意識し、常に張り合おうとしていたように思われます(秦皇漢武という言葉もあります。もっとも、武帝時代の歴史の改竄にも拘わらず、リーダーとしての資質は始皇帝が傑出していたことは明らかです)。BC110年に、泰山で封禪を行った武帝は(後には、光武帝、唐の高宗、玄宗、宋の真宗等も封禪を行いました)、始皇帝が作った渤海沿岸の離宮を訪れました。遥かな東海を眺めながら、武帝もまた、不老不死の幻想に囚われ始めていたのです。BC104年、武帝は10月から始まる秦暦を改め、正月から始まる太初暦(夏の暦。太陰太陽暦)を採用しました。その頃、父、司馬談の遺志を継いだ司馬遷が、堆く積まれた竹簡を前にして、稀代の歴史書「史記」の執筆に心血を注いでいたのです。

晩年に入った武帝は李夫人に溺れて暗愚となり(傾城、傾国の美女という言葉が生まれました)、国運は徐々に下降線を辿ります。BC91年、巫蠱の乱が生じ、皇太子李戩が(無実の罪で)廃されました。BC88年、西域に敦煌郡が設置され、敦煌の歴史が始まりました。武帝の死後(BC87)は、8歳の昭帝を擁して、夭折した霍去病の弟、霍光が権力を握りましたが(霍光の大権から閔白という言葉が生まれたのです)、第9代の宣帝(民間に匿われていた李戩の嫡子。BC74~49)は、霍光の死後、霍氏一族を滅ぼし、匈奴を東西に分裂させるなど、漢帝国の中興を果しました。また、宣帝は、匈奴の脅威が去ったので、烏壘城(敦煌の西方、亀茲のやや東方)に初めて西域都護を置き(BC60年)、西域の本格経営に乗り出しました。しかし、宣帝の死後は、外戚の専横が続く中、(漢)王室は衰亡していきました。王政君が皇后に冊立されたのは、BC48年のことでした。この一族からやがて王莽が出ることとなります。BC33年、漢の後宮にいた王昭君が匈奴の呼韓邪単于の元に嫁いでいきました。漢と匈奴は、武帝や王莽の特殊な時期を除き、概ね、平和共存していたと考えられています(通婚も盛んでした)。



自著自薦 「『投資』に偏見を抱くアナタへ — 月々500 円から！ k2k2 と世界中の株式への投資を楽しむ」

投信ブロガー Renny

投信ブロガーの rennyと申します。ブログ『rennyの備忘録』を約8年運営しています。ブログのテーマは「投資信託にコツコツと継続的に投資して資産を育てよう」というものです。

もしかしたらインベストラ이프の読者の皆さんの中には既に拙ブログの存在をご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが。いつもブログにお越しくださってありがとうございます！

一方で、今この瞬間、初めて「renny」なるブロガーの存在を認知された方もいらっしゃるでしょう。はじめまして！よろしくお願いします。

そんな私が、このたび、電子書籍「『投資』に偏見を抱くアナタへ — 月々500 円から！ k2k2 と世界中の株式への投資を楽しむ」を発売しました。これまで 3,000 本以上のブログ記事を書き続けてきましたが、ブログでまとめたメッセージを順序立てて伝えるのは難しい面があると常々感じていました。そこで一念発起、電子書籍に挑戦することにしました。



この電子書籍の特徴を3つ挙げてみます。

1)「肉声」です：今回の電子書籍はいわば「自己出版」です。プロの編集者のサポートを得たわけではありません。したがって、構成から何から全て私自身が行いました。そのため、構成や表現に



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

拙い箇所、読みづらい箇所が沢山あると思います。しかし、「自己出版」なればこそ私の「肉声」を生々しく表現することができたと感じています。

2)「投資なんて・・・」とネガティブなイメージをお持ちの方に呼びかけています:投資、資産運用に関する出版物は通常、投資・資産運用に興味を抱き始めた人や既に行動を起こした人を対象にしていることと思いますが、今回の電子書籍は違います。「投資なんて・・・」という方々に、投資を試みることの楽しさを伝えようと試みています。

3)低価格:ターゲット読者を「投資なんて・・・」という人に決めた以上、高い価格設定は無理です。また、上記の通りの「自己出版」ですから読みづらい部分が多々ありますが、プロの作業が加わっていない分、低廉な価格設定が可能です。

一人でも多くの「投資なんて・・・」という人の手許に届けられるよう、今後もいろいろと取り組んでいく所存です。引き続きよろしくお願いします。

投信ブロガー reddy
BLOG: <http://reddy.jugem.jp/>
電子出版: <http://p.booklog.jp/book/62294>
 <http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00DRB3466>

合計197歳が 「100年に一度」を語りあう（後編）

経済評論家の三原氏と、本誌講師を務める澤上、岡本の3人が、巷を賑わす「100年に一度」について語り合った座談会。前号では投資と経済発展の関係など、多岐に触れつつ長期投資のおもむきについて語り合ってきた。今回はその続きとして投資の本質と金融危機後の考察を紹介していこう。

ゲスト：三原 淳雄氏

インベストライフ講師：澤上篤人、岡本和久



【三原淳雄氏プロフィール】

▶経済評論家。1937年、大分県出身（旧満州国生まれ）。59年、日興証券入社。ロサンゼルス支店長を経た後で80年に独立、(株)インパルス設立。99年、東証ベンクラブより長年証券界のために尽くした功績により、東証ベン文化賞を受賞。(社)日本商品投資販売業協会理事、日本IFA協会理事長、大阪経済大学大学院客員教授などを務める。レギュラー番組に「東京マーケットトゥデイ」(BSイレブン)などがあり、執筆活動や講演など幅広く活動。

金持ちが金を使わないと この国の経済は立ち行かない

三原 本来、長期投資は成功するもの。それを広く知ってもらいたくて僕は50年がんばってきたけど、定着しませんね、この国では。

ちょっとテレビできついこと言うと、文句が来るし。たとえば、この時期に株買ってくれる人には相続税をゼロにしたらいんじゃないかと。その代わり何年間かは売らずに保持するように規制しよう、と言ったら、「金持ちを優遇するのはけしからん」と叩かれる。だけど、金持ちがもっと金を使ってくれないと、この国の経済は立ち行かないのに。

澤上 まったくです。

三原 たとえば、ある株を「10万株まで、10年持てば無税」という方法をとれば、市場はすごく活性化するのに。

岡本 株式市場を活性化して株価を上げていくことがいかに大切か感じていないんでしょうね。

澤上 株価が上昇すれば個人の消費も企業の投資意欲も高まり、日本経済はもちろん国民の生活にも大いにプラスになるのにね。

三原 金持ち優遇はけしからんと言ってる連中は、資産効果の効用がわかっていない。税金で得た、株で得たというお金が最も消費性向が高いんだよね。

岡本 バブルの時にあんなにも景気が良かったのは、株価が上がったからですね。

三原 株と土地も上がりました。だから90年ごろは「シーマ効果」と言われて3ナンバー車が売れた。数年前にもレクサスが一時売れ始めたけれど、やはり株と土地が上がった時期ですよ。

岡本 役人は、株価が盛り上がるものすごい経済効果があるとは考えないんでしょうかね。

自国の通貨が強くなって 嘆くのは日本だけ

三原 日本の風潮がおかしいのは、いまだにGDP神話があるからですよ。つい最近までの好景気は、期間としてはあの「いざなぎ景気」を抜いた。ところが誰も好景気の実感はなかった。なぜならいざなぎの時は、名目が実質の倍くらいあって、個人の月給もどんどん増えていった。実際にはインフレが先行していたけれど、名目が増えると、人間、気持ちがいいんです(笑)。

岡本 今回は名目と実質が逆転し

Photo：池永一之

ているから、誰も名目のことを言いませんね。

三原 これまでの日本の金持ちは、現金で持つのが正解だった。ところがこれからはそうはいきません。今後、新興国の景気が良くなってきて、彼らの生活が向上するにつれ、再び原油が上がり食糧が上がる。

澤上 将来的にインフレ方向にあるのは、もう目に見えていますね。

三原 新興国は金融危機があるからダメだという人もいますが、人間誰しも良くなりたいという欲を持っていますから。新興国が良くなるのは目に見えている。だとしたら日本は今がチャンスなんです。そのひとつの理由が円高ですよ。ふたつめの理由は、日本の企業が強くなれば、海外の企業を買い、油田や鉱山を買う。日本の国策にも沿っています。

今こそ、日本の企業にもっと体力をつけて、強くなってほしい。

澤上 そのために今、株を買って企業を支えてほしい。

岡本 おもしろいですよね。世界の主要国で自国の通貨が強くなって、嫌がっている国は日本だけです。他の国はみんな自分の国の通貨をどうやって支えようかと必死になっているのに。

円が安くなると株が上がる。これも変なものです。本当は円高→株高なんです。80年代にトリプル・メリットってあったじゃないですか。確かに円高になると過大に評価されてきた輸出産業などは一時的に厳しくはなりますけどね。

三原 今までが円安バブルだったんです。円安バブルで儲けただけ。

岡本 結局、円安バブルがあって、

今期の予想にしても、前期の決算にしても、膨らみすぎていたのが実体のほうに戻ってきて、それをみんなして減益だと大騒ぎしてるということですね。

三原 トヨタが今、どんどん人員削減していますが、トヨタの利益の多くは北米で稼いだもの。国内はもともと赤字です。だからトヨタが払っていた法人税は、アメリカ人が払っているのと同じことだった。経済ってそういうもので、単純に考えれば理屈がわかるんだけど、今の日本って考えるのをやめている気がする。

僕はそうした潮流には逆らうことにしていますけど（笑）。そもそもマーケットは本来は逆張りでないで勝てない。だから資産家は恐慌時に仕入れて、ブームの時に去る。いつの時代もそうです。

金融危機が去ったあとはハイパーインフレがやってくる

岡本 つい最近でも日経平均4000円騒動が出たときに買った人は大儲けしてたわけですよ。

三原 考えろというのはそこです。あのころは銀行バッシングで、銀行はみんな潰せというムードだった。だけどよく考えたら銀行を全部潰して一番困るのがわれわれです。

金融システムはわれわれの財産でありインフラです。決済できなくなるから潰せない。銀行が潰れる寸前の値段で叩き売られていたんだから、買っておけばいいんです。

岡本 そういう意欲をすっかりなくしてしまうのが「100年に一度」という言葉ですよ。

三原 確かにすごいことが起きていることは間違いない。おしなべ

て上場企業のPBRが1を割っていることもそのひとつ。1.5ぐらいで評価している企業が、1以下で売られているというのは、ここ50年で初めての経験です。

澤上 配当利回りが長期金利を上回っているなんて、本当に久々ですね。

岡本 企業の成長性をほとんど評価していない。

澤上 長期投資家にとっては、一番おいしいところなのにね。

三原 世界中の金利がほぼゼロになったこと。これも初めての経験です。

澤上 将来えらいことになりますよね。今はみんな「金融危機だ。景気後退で大変だ」って言うんですけど、そんなものは3～4年のうちに収まります。

それより問題は世界中に金をばらまき、金利を下けていること。どこの国も財政赤字がひどくて、国債をどんどん発行していたら、最後はどうなるのか、みんな考えてほしいよね。

三原 景気は循環するんです。業績が良くなると必ずバブルになる。今度はそれを潰しにかかるから金が締まる。すると金がなくなって今度みたいな金融危機が起こる。つまり、まず業績相場があって、その次は逆金融相場ができ、金融が行き詰まる。この繰り返しです。

岡本 今後はどうなるか、一人ひとりが自分の頭で考えてほしい。

三原 各国政府は今、どんどん金を出している。アメリカなんて禁じ手の乱発でしょ。時価会計を緩和し、FRBがCPでも何でも直接引き受けると言い、そのうちサブプライムも買うと言っています。ところが景気対策はすぐには効かない。そして国民は目先しか考え



岡本 和久

ずに「もっともっと」と連発する。

澤上 だから、お金のバラ撒きを景気がよくなるまで続けることになる。やめられないんです。

岡本 いずれ、インフレがやってきますね。

三原 経済が循環するスピードも速くなってきている。もうDRAMは少しずつ上がり始めているし。

岡本 原油も底から上がってきています。

澤上 もう一つはね、需要が上がりだしてくると、仮需が出てくる。でも生産ラインは一回落ち止めるとすぐには供給を再開できない。本格稼働にはかなり時間かかるんです。化学工場の場合などは再開するには2カ月くらいかかる。

三原 落ちる角度が急だったから戻ってくるのも急だという絵を描く人も多い。

澤上 ミニバブルの到来ですね。

岡本 「100年に一度」と言っただけで、過去に克服できなかった金融危機はない。歴史を振り返ってみても、何千年もかけて人類の生活は良くなり続けている。時々不況になるけれど、終わらない不況はないんです。

今回は長いかもしれないけど、

でも必ず終わりますよ。

トンネルに光が見えたときは時すでに遅し

三原 この国はこれから投資家を育てなければいけないんだけど、まったく育てない。

岡本 本当の意味の投資家ですね。

三原 そう。この企業はわが国の成長を助けてくれる企業で、わが家にとってもこの企業が大きくなるのは良いことだ。製品も素晴らしいから、この企業が外国勢に乗っ取られると困る。だから株主として応援しよう、と。こういう発想を持って投資する人がいない。

岡本 株価なんて見なくていいんですよ。持っているだけでうれしいと思える会社の株を持てばいいんです。

三原 バフェットがそうですね。バフェットは、その会社が社会に役に立つ会社か、経営者はしっかりしているか、正直者か、横並びの圧力に屈しない人か、で選ぶ。

普通は買収すると経営者を入れ替えるけど、彼は「自分は経営者を選ぶ能力はない」と言ってる。だから入れ替えない。信頼に足る経営者がいる企業の株を買うから、替える必要がないんです。

岡本 そうして株を買ったら放っておけばいい。

三原 彼は、自分の買った株は永久保存だって言ってる。売るとは考えていない。売ることがあるとしたら、それは経営者に信用がおけなくなったときなんですよ。

岡本 株主であることの喜びがある会社の株を持っていれば、株価なんて関係ない。

三原 それには今は絶好のチャン

スですよ。5%の配当利回りで20年持っていたら、元が返ってくる。こんなチャンスはめったにない。

岡本 それなのに、なぜ株価がこういう状態になっているかという、トンネルの中が真っ暗だからです。向こうにちらっと明かりが見えたときにこの株価では買えなくなる。トンネルは終わりだ、早く買わなきゃと思ったときは、もう手遅れ。だから光が見えないうちに買わなくては。

三原 春の来ない冬はない。必ず春は来るんだけど、どこで兆しを見るかが重要。去年のキーワードは「変」だったけど、僕は今年のキーワードは「兆（ちょう）」だと言ってる。まずは蝶の羽がぐーんと伸びるように金がばらまかれる。すると次は兆しが見えてくる。そしたら、その兆しに挑戦するかどうかを考えるわけです。挑戦の「挑」も手届に兆です。

岡本 いいですね。

三原 「蝶・兆・挑」です（笑）。今年には兆しが見えてくる年だと思う。事実見えかけているような気がするんだけどな。

岡本 予兆のない変化はないって言いますから。たとえば上海の株式市場がけっこう堅調になってきている。もちろんまだ予断は許さない。このトンネルは意外に長いかもしれない。だけどいつトンネルの向こうに光が見えるかわからないんだから、やはり時間をかけて貯めておくしかない。

三原 だけど、すでに6割下がった指標で、今後さらに6割下がることはあまり考えられませんね。

岡本 ないでしょう。だって株には価値があるんだから。ゼロには

ならないですよ。

S社株を持っていたら 今は10億になっていた

三原 人生をどうやって豊かにしていくかしないかは、マーケットをどう利用してどう動くかで大きく変わるはずなんです。僕の場合、入社した時に試しに大借金をしてS社株を500円で500株買った。すぐに700円になって10万円儲けたのが過ちの始まりです。もしも売らずにずっと持っていたらと考えて、15年前に計算したらその時点で10億になっていた。

当時のS社の資本金が3億円。それを知って、長期投資家に変更したんです。当初から正しく株式投資を理解していたらと思うとすごく残念。

岡本 持っていたらすごいですね。

三原 僕は、株はトレーディングだと思っていたから、1万5000円くらいの月給の時に10万円儲けて天下を取ったような気分だった。自分は天才じゃないかとさえ思った。それで方法を間違えた。

岡本 セブンイレブンやヤフー株もそうですね。最初に買って売らなかった人が大金持ちになっている。

三原 ゲームウォッチが流行ったところに任天堂を買っていたら、とかね（笑）。

岡本 ゲームウォッチってありましたね。懐かしい。

三原 あのころ、任天堂の株価は1000円～700円くらいで動いていた。トレーダーは1000円で買って700円になったら、大損した、証券会社に損させられたって騒いだんだろうけど、今となってみれば

1000円も700円でも関係ない。だって、もし今も持っていたら1億5000万くらいになっている。

岡本 みんな欲がなさすぎるんですね（笑）。

三原 だから長期投資がいい。投信の手数料が高いなどと文句を言うのは大間違い。高くてもかまわないからそのかわりいい運用しろよ、と言うのが正しい。

岡本 そうなんですよ。

三原 ところが、どの投信も手数料を安くしているから、持っているほうもすぐに売ってしまって投信が育たない。僕だったら、買うときは安くしておくけれど、すぐに解約したら半分くらい手数料でいただきますよという投信を作る。たっぷりと懲罰的なペナルティを取るんです。そうでもしないと長期投資の土壌が育たないんじゃないかな。

岡本 あとは税金でしょうね。譲渡益課税を長期の場合、安くする。

三原 アメリカは1年かな。

岡本 1年です。1年以上だと税金が安くなる。

三原 アメリカでは個人の住宅は基本的には無税で、自分の家なら2軒まで無税。売却益も50万までが無税。こんなに無税なら退職金がわりになる。だからアメリカ人は貯蓄しなくてもよかった。

「変化」と「不合理」が マーケットを活性化する

岡本 私たちは常に柔軟な思考でありたいと考えている。それはマーケットとつき合っているからかもしれないですね。常に固定的なものには裏切られているから。

三原 証券会社や投信会社では、



澤上 篤人

変化がすべて種になる。いい意味でも、悪い意味でも。だから変化に敏感です。逆に言うと変化がなかったらマーケットは立ち行かない。

有名な相場の格言に「株屋殺すに刃物いらぬ、寄り引け同値でザラバなし」という言葉がある。

岡本 動かなければ何にもできない。

三原 マーケットが合理的には動かないから、逆にそこにチャンスがあると考えるし、だから証券会社も生き延びている。もともと日本人は潔癖なところがあって、合理的な結論をすぐ求めたがる。だけど今は不確実性の時代。合理的な考え方が通用するわけがない。

澤上 たぶんほとんどの人は合理的と信じ込めて、なおかつ変化がない日々が続くのが好きなんですよ。

三原 今日も昨日と同じで、明日も今日と同じであってほしい。自分の立場が安穩であるほど、そう思うんだけど、日本は戦国時代を経験してる。その時の有名な言葉に、誰が言ったか「治に居て乱を忘れず」というのがある。「転ばぬ先の杖」とも言うよね。

岡本 本来、リスクとは不確実性のことを言うんですよ。そしてリターンは、そのリスクから生じ



る。そのことだけでもはっきり投資家が理解すれば、怪しい投資話にひっかかることはまずないんですけどね。

三原 何のためにマーケットがあるか、なぜサブプライムが大ごとになったのか。その答えは流動性の問題です。流動性があればリスクは自分でコントロールできる。1000円で買って950円でリスクを確定しようが、900円で確定しようが、全部自分が決めること。本来そのためにマーケットがあるんだから。

岡本 今回の場合には、流動性に伴うリスクっていうものを十分理解していなかったということなんでしょうね。流動性がないことによって売りたいのに売れなかった。

三原 そう。それが最大のリスク。もともとマーケットは自然発生的に生まれたんです。

シカゴの穀物取引所が自然発生的に生まれたのも、最初から投機のために誕生したわけではない。穀倉地帯で、農家にしてみれば早めに利益を確保しておきたい。そこで今年の収穫を先物で売れば、ある程度の計画が立てられるけれど、その代わりリスクがある。上がったときには上がった儲けは相手のもの。その代わり下がったときのヘッジができる。本来これがマーケットの役目です。豊作がリスクになるわけですから。そうやっ

て生まれたのが穀物取引所です。

僕は1970年に興味があったから見学に行ったんですけどね。予想以上にすごかった。現地の人が説明してくれたんだけど、「世の中で商品化できないものは水と空気だけだ」と豪語してた。今や水も空気も商品になっていますけどね。

今こそ大チャンス 原点に戻った投資ができる

岡本 個人投資家が株式の投資をすることによって、思考の柔軟性を保てるというメリットがありますよね。年をとっても思考がカチカチになるんじゃないって、わりと弾力的に世の中見ていけるとか、何でも興味持てるとか。それはすごく大きなメリットだという気がしますね。

三原 ただ、人と同じじゃないと安心できないというDNAからは早く脱してほしいけどね。

岡本 日本人はあまり投資に向いてませんよね。

三原 うん、向いてない(笑)。宇宙から地球を見るぐらいの視点でこれからの世界見ていかないと。世の中がグローバルになってお金のどこに流れているか、ここでお金を流しているやつはどういう人物かといったことを常に頭で考えることが必要。中国人は向いています。というのは、中国人は国をまったく信用していない。

岡本 日本人のDNAに合った投資の仕方をしてほしいんだと思うんだけど、要はそれこそ田植えするようなつもりで投資をしていくといいかもしれない。

三原 1年で収穫できちゃうけどね(笑)。

岡本 では、林業ですね。

三原 桃栗3年柿8年。まだ短い。

岡本 (笑)。日本人の感性に合った投資の仕方がもっとたくさん出てきて、日本人の個人金融資産が向かっていくようになれば、そこに日本的なマーケットが形成されてくるんですよ。外国人の真似しているばかりではなくて。要はイスラム金融みたいに一つの大きな力になればいい。

三原 日本人は、お金は持ってるんだけどね。惜しい、本当に。

岡本 そういう意味ではこういうチャンスってめったにない。一度に全部やる必要はないけど、今やらないと本当にもったいない。

三原 100年に一度の危機と言ってるけど、僕から見れば50年に1度の大チャンス。こんなことは僕の人生のなかで初めてです。だから一回原点に戻って考えてみませんかと言いたい。

投資とは何か。株とは何か。利益を出しているのは誰なんだ。利益の元は、どんなモノやどのようなサービスなのか。それは世の中に喜ばれているのか。世界中の人が欲しがっているのか。宇宙から地球を見る発想で見つめてみたい。

宇宙から見た視線で マーケットをとらえる

三原 僕はね、日本にこだわる必要はないと思う。日本では作って

いないもの、日本にはないものを海外に求めればいいと思う。

インフレになるのが心配なら、それこそブラジルやオーストラリアの鉱山会社を買うのもいい、これがヘッジです。そのうち資源が値上がりするにつれ、自分たちが生活で使うモノも値上がりしていきます。そこで値上がりする株を持っていればヘッジできることになる。

澤上 そういうことですね。

三原 そういうトータルで見たヘッジが大切です。

岡本 基本に戻り、株を持つという事は、その企業の資産を持っていることにつながります。仮にモノの値段が上がっても、その企業がメリット受ければ購買力を維持していくためのヘッジになる。

三原 モノの値上がりが大変だと思うのなら、根っこを押さえておけばいいということ。

岡本 そうです、それが宇宙から見た視線です。

三原 今、グローバルっていうのは、宇宙から見ることだと思う。難しく考えずに、モノがどこからどこに流れて、その際、お金はどう流れるのか。それさえ押さえておけば自然とお金が流れそうなところにお金を置くようになる。

澤上 もはや日本だけではなく、どこに投資してもいいと思いますよ。今、世界中がお金をばらまいている。だから資源だろうが、株だろうが、必ず何かが上がります。その何かを今、買っておかないと。現金や預貯金のままで置いたら、大変なことになる。貴金属や穀物、商品でもいいし、モノを作る会社の株でもいい。何もかもがみんな安いんだから。

岡本 しかも世界中が安い。

三原 分散投資がまったく効かなかったのはこれが初めてです。今までポートフォリオの基本は分散投資でしたが、今回ばかりは現金以外はすべてダメ。金も石油も債権もみんなダメです。幸い日本人は傷が浅い。キャッシュしか持てなかったんだから。

澤上 ここで買わないと。

三原 そう。今こそ何もしなかったメリットを生かすべき。なのにみんなが損した損したと大騒ぎ。冷静に考えれば大して損はしていないんですけどね。

世界で3200兆が株式市場から飛んだのに、日本の個人金融資産がどれだけ減ったか考えてみればいいんですよ。

澤上 1544兆から1434兆への減少だから110兆しか減っていない。

三原 その18%が個人。全金融資産1500兆のなかで株式は10%しかない。仮に10%が半分になっても5%。まだ95%が残っている。

澤上 大事なものはその程度減っても人生終わりじゃないということ。あと50年くらい生きるとしたら、ここから将来のために何をやっておくかが大事なんです。やった人に比べて、やらなかった人や、やったことはやったけど方法を間違えた人は大変ですよ。

岡本 それがまさに変化についていけるかどうかという話なんです。今までは預貯金が一番安全だと思っていたと、ひどい目に遭うことになる。

苦言を呈しても 投資の力を伝えていきたい

三原 僕は「あいつは一生投資家

のために苦言を呈してくれた」と、そうみんなが思ってくれたら生きた価値があると思う。だから耳に残らないような優しいことは言いません。覚えていてほしいからね。なぜなら自分がさんざん失敗しているからね。

株の理解が足りなかったから、資本金わずか3億円のS社の株主になっておきながら、すぐ売ってしまった。証券会社に就職し、株は安く買って高く売って手数料を稼ぐものだとずっと思っていた。気づいたときには、バフェットがずっと先に行っていた(笑)。

澤上 私も長期投資のパワーについては伝えたいですね。特に若い人たちに。

岡本 若い人には長い投資のための時間がありますからね。

三原 長期の株式投資は多角経営みたいなもんだと考えたらいい。自分がやりたいことはいっぱいある。だけどそんなにたくさんすることはできないから、やってるところに投資するんです。自分のお金にあっちこっちで働いてもらう。そう考えると株の見方も変わってきます。この会社は5年後もまだがんばっているだろうか。5年後は大きくなっているだろうか。いやきっと消えてなくなっているだろう、と。そういう視点から会社を判断するようになると、株に対する考え方も違ってくる。トレーディングこそじいさんばあさんがやるべきなんです。若い先短いし、やっていたらボケない(笑)。

岡本 今日明日の金を稼ぐためではないんですね。

三原 そう。ボケ防止で朝起きたら、まずコンピューターに電源入

れて、バタバタやって、パチンコぐらい負けたなと思ったらそこでやめればいい。薬代がかからないポケ防止策。

澤上 そして若い人は長期投資。

三原 残りの金で孫のために長期投資の布石をしておけば、お墓参りにも来てもらえます (笑)。

投資もいろんな形があるけど、若いうちからトレーダーやるのは時間の無駄。携帯にすぎったり、パソコンの前に座っているより、ほかにやることはいっぱいある。

岡本 まったく同感です。若い人は時間を持っているんだから、時間を味方にした投資が不可欠。

澤上 そしてタイミング的には今が最高。

三原 しかも世界が生まれ変わろうとするときからスタートするわけだから、何でもヒントになる。

ベンチャーへの投資の成功率は7%

澤上 78年から84年の間のアメリカはひどかった。長期金利が16%で、短期金利が19%。瞬間的には21%まで行った。もうめっちゃくちゃです。その少し前にマイクロソフトやインテルが生まれ、デルやアップルが大きくなった。シスコシステムズやサンマイクロシステムなど一番ひどいときに登場した。

三原 不況のときには、新しいイノベーションが出ますよね。その技術で世の中がガラリと変わる。

岡本 そういう兆しを見つける姿勢が大切ですね。

澤上 投資していれば自然と見わかります。不思議なもので、これは買っておこうかなと感じるんです。変化は、国ではなく、まず個

人と企業に訪れます。未来を作る主体は常に個人と企業です。役人ではない。そしてその変化は、その場に参加していなければ感じられないんです。

三原 好奇心を持っていると世の中がどう変わり、誰が何を仕掛けてくるんだろうということに関心が向かう。自分が仕掛けられないなら、仕掛けている人に投資すればいい。負担にならない金額でいい夢を見て、うまくいったらすごいことになる。

アメリカの投資家は、ベンチャーに投資する成功率は7%ぐらいだと知っている。そこで彼らはまんべんなく種をまく。そこがアメリカ人と日本人の違うところです。日本人は完ぺき主義だから、自分が投資したところが全部成功しないと納得しない。失敗ばかりを悔やみます。

たとえばマイクロソフトあたりを買っていたら今大金持ちになっていますが、アメリカの場合は、最初からマイクロソフト1社を買うわけではない。同じような企業を数多く買って、その多くはつぶれている。日本ならつぶれた方を気にするけど、彼らは競合がつぶれたからこそ、この1社が伸びた。だからこれは必要経費みたいなものだと考える。日本人はそれができない。

澤上 そこを割り切れるようになるといいんですけどね。

岡本 トータルで見て、資金がどう増えたかが大事なんです。個別で勝った負けたというのは、些細なことですよ。

三原 自分が経営しているわけではないしね。他人が経営している

会社がうまくいかなかったって、自分が見る目がなかったというだけ。そもそも全体を増やすために投資しているのだから、トータルで見ないと。

仮説を検証する面白さ 投資は本来楽しいもの

岡本 そもそも投資をスタートしないことには意味がない。

三原 まず、さわかみファンドに入る。そして積み立てで少額を投資しながら彼の知恵を盗む (笑)。ファンドに入ると毎月運用を報告する手紙が来ます。澤上さんが間違えているなどと思ったら、解約すればいいことですし。

澤上 全部載せているから、全部見られてしまいますね (笑)。

三原 彼の考えていることがわかるから、何で彼はこう考えたのかとか、自分は違うのかなとか、彼は大きな企業しか入れていないけど、よく調べていくと、同じ絡みで小さな会社もある。ということは大きく伸びるのはこの小さな会社の方だろう、と推測するのもいい。それは何十倍にもなるかもしれないから押さえておこう、とかね。

澤上 勉強のための投資ですね。

三原 そう。授業料を払うようなもの。そう考えていくと楽しいですよ。

どうしてみんな歯くいしばって目を血走らせて、びた一文損したくないと思うのか不思議です。投資とは本来楽しいもの。自分で想像しながら推理小説を書いていくような感じでストーリーを作っていくわけです。楽しくないわけではない。

岡本 多くの人が、自分で作って

いくのではなくて、教えてもらおうとする。要するに何が儲かる？という結論だけ知りたがる人が多いけれど、本来は自分でストーリーを作らないと。

三原 ストーリーを作るそのプロセスが楽しいだけだね。

岡本 自分の仮説と実際のマーケットの検証をしながら、いろいろ考えていくのが楽しい。

三原 こういう考え方をしていると、1日が長く感じます。興味がわくから、新聞の読み方もテレビの見方も違ってくる。ひょっとすると街の歩き方も変わってくるかもしれない。この店が流行っている、こういう色が流行っている。何でもヒントになりますから。

投資はおもしろいですよ。視野が広がるから、話題も人脈も人生も広がる。儲けは、楽しんだあとの結果なんです。

大恐慌も長い目で見れば トレンドの中のさざ波

澤上 今回のようなアクシデント的なことがあって、自分が持ってた株がガンと下がったとする。でも、まだ企業は生きている。だったら、長期投資家は黙って買っておけですよ。

三原 マーケットとは、そうしたもので、そのときは大変だ、こんなに落ちてしまったと思っても、長い目で見ればさざ波です。僕は、何度もそんなことを経験してきている。

ITバブルがはじけて、ナスダックが半分以下になったことも、もうみんな忘れてる。ブラックマンデーでもこの世の終わりのような騒ぎになりました。でもこの世は終わっていない。その前にはオ

イルショック、為替切上げショック。何度もショックに見舞われている。あとから考えてみれば、どれもこれも長いトレンドのなかではさざ波だったと感じます。半値になったのは、あなただけではない。みんな半値になっている。そこで、ここからどう生き返るかを考える人と、あいつに買わされて財産が減ったと思う人とは大きく差がつくところなのです。

澤上 決定的な差になりますね。

岡本 株に投資すれば、こういうことに出合うのは当然で、それが嫌なら預金に預けてインフレにやられてください、という話になってしまう。

三原 何が起きるかなんて誰にもわからない。けどそんなことを気にする人は株式投資をやってはいけない。経済は最終的には必ず成長します。それを信じて、大きくなる会社を見抜き、その株主になりましょう、というのが究極の投資です。この発想を持つことで人生も変わりますよ。

たとえば、若いときから高給取りで平均年収が1千万だったとしても、働けるのはせいぜい40年。生涯年収は4億です。自分の力で稼ぎ出すお金は、サラリーマンで最大4億。年収200万の人なら8000万円。差がついたところでそんなものです。だけど、マーケットを信頼するかしないかで、僕とバフェットの差がついた。それを知り、そこから何を学んでくれるのか。成功を追いかけるのもいいけど、僕の失敗からも学んでほしい。それこそ若い人に伝えたい。

澤上 みんなに第二のバフェットになってほしいですよ。



三原 自分一人の力なら、一生かけても差がついて1億と4億程度。それって40年間でならしてみたら、せいぜいちょっといい家に住むとか、息子が公立行ってるか私立行ってるかとか、どうってことない差でしかない。ところがバフェットの6兆円対8000万円。この差は大きい。

一同 (笑)

三原 難しく考えることはない。自分が稼いだお金を使って、人が稼いでいるところで、もう少し稼ぎませんかというのが株式投資。しかも夢を託しながら。そして夢が実現するところが株式市場だから、チャップリンの言葉じゃないけど、人生に必要なのは「夢と希望とサムナー」。さわかみファンドを始めるお金があればいい。

岡本 とても楽しい対談でしたね。ありがとうございました。



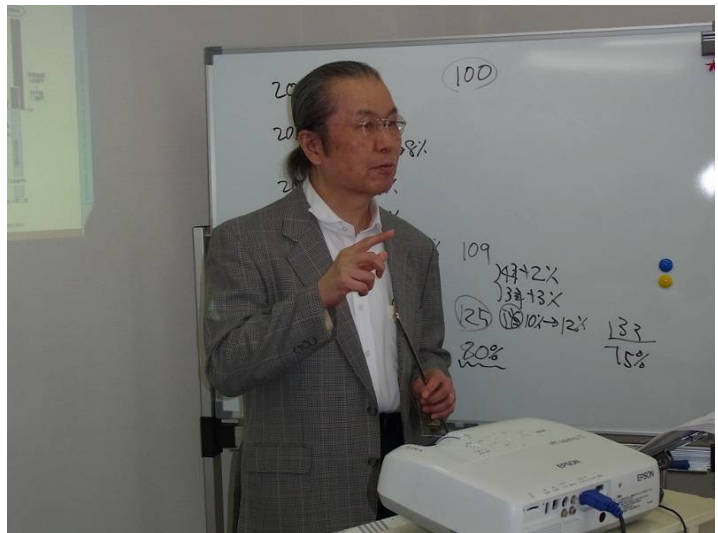
驚くほど簡単な退職金運用

講演: 岡本 和久

レポーター: 川元 由喜子

運用の目標を、「購買力の維持」ということに置いて資産運用を見直してみましよう。今後の物価がどうなるかはわかりませんが、年 2% が政策目標となっている事や、数回にわたる消費税の引き上げだってあるかも知れないことを勘案すると、10 年ぐらい後には、今より物価が 25% や 30% 高くなる可能性だってあります。働いている人は、給料でそれなりにヘッジされています。しかし、退職者が持っている資産の価値は、物価が 25% 上がれば、今ある資産の価値は 80% に減ってしまいます。そこで退職金運用の目的を、「リターンを上げる」から「価値を防御する」へ切り替えて行かなければならないのです。

具体的に言うと、退職した人(収入より支出の多い人)が資産を増やしなが取り崩していく「資産活用」の場合の心得は、購買力を維持するために、少なくとも物価上昇率並みに資産を殖やすこと、それから大きな損失を被らないようにすることです。



ポートフォリオ構築の際のお勧めは、まず、物価連動債を組み入れた投資信託に全額を投資し、そして、その一部を、時間をかけながら世界の株式を買っていく、という方法です。物価連動国債は、元本が全国消費者物価指数に連動する利付債券で、持っている物価に対してのヘッジになります。物価水準が下がると元本も利払いも減りますが、物価も下がっているわけですから、生活するという意味では問題ありません。(2013 年から発行される物価連動国債は元本保証が付くことになったと伝えられています) 日本ではこの債券は、個人投資家には販売されていませんが、これを組み入れた投信は買うことができます。

世界の株式を買うというのは、我々の生活を支えてくれている、世界中の産業や企業の生産設備を保有するということです。この発想は、物価という点から見ても安心につながります。世界の産業・企業のどこかにインフレ利得が発生すれば、最終的には配当金か資産価値の増加を通じて株



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

主に還元されるからです。成長の観点からも、世界経済の成功を取り込むことができますし、ヘッジ無しで買えば、為替の変動による購買力の変化にも対応できます。

買い付け方の基本は積立投資です。積立投資には、定株数投資法(CS)やドルコスト平均法(DCA)、そしてバリュー・アベレージ法(VA)などがあります。VA法はあまり一般には知られていませんが、DCA法が定期定額に買い付けるのに対し、VAは、時価残高が予め定められた金額(バリュー・パス)になるように、定期的に資金を投入していく方法で、DCAよりさらに安い時に多く、高い時に少なく買うという効果が得られます。毎期の投資額が大きく振れることもあるので、退職金のようなまとまった資金のある人に適しています。

講演ではこの後、何年ぐらいかけて投資するのが適当か、またどのくらいの頻度で買うのが良いのか、ライフステージの問題やマーケット・サイクルの分析を交えてお話いただきました。また、物価連動国債を組み入れた投資信託や、世界の株式を買うインデックス・ファンドなど、具体的な商品の紹介や、VA法による買い付けの手順、積み立て効果のシミュレーションなど、実践的に解説していただきました。



算数でできる統計データ分析入門

講演： 中央大学名誉教授
統計科学研究所所長 杉山 高一

気温変化などの時系列データ、成分比較のグラフ、アンケート結果の比較グラフ、今年から高校で必修になった「箱ひげ図」など統計にも様々な表現があります。

二つの変量間の関連性について、考えてみましょう。例えば喫煙と肺癌の関連性は有名です。大学入学時の成績と卒業時の成績というのはどうでしょう。こうした関連性は「散布図」に表すことができます。ただ、図で表して関連性があるように見えても、必ずしも関連があるとは限りません。そういう例は世の中にはたくさんあります。因果関係があるかどうかは、統計学の範疇ではないのです。



このような 2 つの指標間の関連性を、統計では「相関係数」で表します。ペアになったデータの関連性の強さを表す方法です。一方のデータが増えると、もう片方も増えるのが正の相関、一方が増える時に、もう片方が減る場合は負の相関があると言います。しかしこの方法で表せるのは直線的な関連だけで、例えば半円のような曲線的な関連は把握できません。

相関係数はゼロと 1、(またはゼロと-1)の間の値をとり、最も強い関連では、散布図の点が一直線上に並びます。相関の強さが「中間」というのはどのあたりでしょうか。(正の相関の場合)0 と 1 の間の 0.5 ではなくて、2 乗して 0.5 になる値、0.71 辺りが中間であると専門家は説明しています。

では例えば相関係数が 0.7 だ、ということの意味は何かと言えば、それはなかなか難しい問題です。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

散布図を眺めて、関連性があると感じられるのが 0.7 辺りから上でしょうか。ただ、この「中間」というのも、0.9 だと主張する人もいて、単純ではありません。

株価もそうですが、時系列のデータから、先を予測することはできるのでしょうか。データの動きの規則性を見つけて把握しようというわけです。ではどうすれば、動きを捉えられるのでしょうか。

そこで、時刻「 t 」での値と $(t-1)$ での値の関係を見ます。時系列で、1 つ手前の値とのペアを作るのです。そしてその相関係数を見ます。これが「1 次の自己相関係数」です。もし関連性が高ければ、ひとつ前のデータは情報を持っていることになります。次に 2 つ手前 $(t-2)$ とペアを作って、同様に相関係数を(2 次の自己相関係数)、更に同様に、3 つ手前 $(t-3)$ との関係も見ます(3 次の自己相関係数)。このように t と $(t-1)$ 、 $(t-2)$ 、 $(t-3)$ …で予測するとどうなるか、それぞれの相関係数を用いて計算する方法が、「自己回帰」です。相関を上手く使って先を予測する方法です。

試してみると、予測値が実際のデータを、結構きちんと追いかけているように見えます。自己回帰の計算は、最小二乗法、又はユールウォーカー法という呼ばれる方法を用いて計算します。「R」という有名なフリー・ソフトウェアが、世界的に使われています。

講演では、多くの統計の例を挙げて、グラフを見ながら解説していただきました。堅苦しそうなテーマでしたが、ユーモアたっぷりのお話で、楽しく学ぶことができました。

生活に密着した統計学

対談： 杉山 高一、馬淵 治好、岡本 和久

岡本| 杉山先生とは、私が 1960 年代の中ごろ、ニューヨークのコロンビア大学というところに留学していたとき、キャンパスで知り合って以来の仲です。当時は日本食を食べたくても、高いし、だいたい日本レストランもそんなになかった。そこで電気炊飯器を持ってきていた杉山先生の寮の部屋に押しかけ、ごはんを炊き、それにお醤油とバターを乗せて食べたりしたものです。その節はお世話になりました(笑)。

杉山| なつかしいですね。

岡本| 統計というと選挙のときの「当確」の出し方がいろいろな議論を呼びます。あの統計処理はどのようにされているのですか？



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

杉山| 統計データ分析の精度は、160万でも1000万でも1億でも変わらないです。ほぼ母集団は無限と考えますからね。僕の所で博士号を取った者が、毎日新聞の調査部で選挙が来る度に猛烈に働いています。杉並区は50万の有権者がいますが、新聞社の取るデータは300です。でも、実際には300だと厳しいですね。ちょっと伯仲している候補者のいる所は、少し無理して500とります。それでもなかなか当たらないものです。新聞社の予想をみていると、20とか30とかずれています。一方、出口調査では4000とか5000とか、凄い数をとります。だから誤差が1%くらいなのです。ランダムかどうかは少し不安があるけれど、すごく正確な数字が出ますね。東京都の都知事選が何年かに一回ありますよね。あの時は800取るとかなり正確なところができます。テレビの視聴率は600ですね。1千万人位の世帯が見ているわけですね。NHKの大河ドラマが視聴率何%になったと言いますが、誤差がかなりあるなど見えています。前のデータがあるのでそれを見て補正しながらやっているのでしょうか。残念ながらやり方がインターネットを見ても書いてありません。製薬会社が開発した薬が効くのかどうかというのを、厚生労働省が実際に患者に投与して、そのデータで『確かに効く』という報告書が出れば認可しますが、その時のデータは、1億3000万人の日本人に対して100人です。100人でいいのかという問題はありますが、大体100人ですね。データの数を決めるのは難しいですね。そして、系列もどこまで過去に遡って取ればいいのか難しいです。ところで株価ってよくわからないですけど、株って値が変わりますよね。

岡本| はい、それは変わりすぎます(笑)。ただ株式の場合には、基本的に企業の持っている本源的な価値というものがあります。1社だけだと潰れてしまうという会社もあるでしょうが、全ての会社を併せてみて見ると、それなりに価値は徐々に増加していきます。価値の増加を反映して、短期で乱高下する株式市場も、長い目で見れば右肩上がりになっています。ここに分散投資と長期投資という二つの大切なルールが成り立つ理由があります。でも、短期株価をみると、思惑、需給関係、心理面によって大きくぶれてしまいますよね。

杉山| 平均値は安定しているから、平均値で考えなさいというのは、正しいと思います。

岡本| ただ、時間的に言うと、平均の所に留まっているというのはなかなかなくて、ぶれている時間の方が長いですね。

杉山| 岡本さんは、株式を平均値の動きでずっと見ていますよね。平均的な所では一つの系列であり、それはそれで面白いかなと思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本| さっき医学の話がちょっとありましたが、株式市場だとバー・ローゼンバーグという人は、もともと医学分野の出身で、一つの薬を与えた時の患者毎の薬効がどういう風に違うのかという研究を応用して、ポートフォリオの分析ツールを作ったりしています。株価がどういう要因にどういう反応度を示しているのか、それによってリスクを推計



していこうという、モデルを作って大成功した人がいます。医学と株式市場はアプローチ的に類似しているところがあるのでしょうか。因果関係の話で言うと、サザエさんの視聴率と株式市場の関係を研究した方もいます。日曜日夜放映のサザエさんの視聴率が高い時は、みんな自宅で食事をしているから景気が悪いのです。景気が良くなると、日曜日は外食するから視聴率が下がるそうです。ですから、サザエさんの視聴率が下がると株価が上がるというわけです。また、馬淵さんの『父ちゃんの立場指数』という有名な指数があります(笑)。デパートの衣料品の売上で、紳士物の売上の伸びと、女物の売上の伸びの違いですね。

馬淵| 紳士物の売り上げは不況の時に、大きく落ちますが、景気回復期の時は紳士物が大きく戻ります。奥さんは、自分の服は不況でも好況でもあまり単価を変えないのです。その点、お父さんは、不況の時は圧迫されてお母さんから『あまり服は買わないでね』と言われて減ってしまいます。

岡本| お父さんの立場指数、今の状況はどうなのですか？

馬淵| 今はプラスです。ひと頃よりは、お父さんの立場は回復しています。しかし、紳士物は伸びていますが、伸びが伸び悩んでいます。実はこの指数は、景気の循環を見ようとして作ったものなのです。実際、2002年の始め、ITバブルが崩壊して一番悪かった時にボトムがあったので合致しています。その後2回ボトムがあり、2011年の秋と2012年の夏がボトムでした。2011年秋は、イタリアの財政懸念で株価が悪かったのと、昨年の中頃はスペイン問題で株式市場が低迷した。株価の底と大体一致しているのでそういう意味では面白いかなと思います。ただ最近は株価の勢いが強すぎて父ちゃんの立場が株価についていけないですね。やはりまだ、実際の雇用環境はそんなに改善していない。失業率は低下していますが、所定外労働時間がマイナスです。普通、残業時間は先行指標なのです。まず企業は



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

従業員をすぐ増やすよりは、今いる従業員に働いてもらい、残業を増加した後から雇用が改善します。今、残業時間がマイナスなのが怖いなというのと、雇用の伸びを見ると、正社員は全部マイナスなのです。パートは増えていますけどね。やはり、まだトータルの労働コストを抑制したくて、雇用は増やすけどパート中心という感じが非常に強く出ています。2002年の景気の回復の時は、パートが先行していたので、景気が回復していると言われながら回復感がなかったですね。今は所得の方の改善をやや欠いたままで、少し気分として浮かび上がっているだけなので、株価の上昇は实体经济と比べると早すぎるなという気がしますね。気分が明るくなって、その結果、更に景気が明るくなることはありうるのですが、株価はちょっと行きすぎだと感じます。でもそれは、水準が高すぎるというよりは、スピードとして上がりすぎですね。行き過ぎが更に行き過ぎることがマーケットではよくあるので、そういう点でこの勢いがまだ続くのかもしれませんが、しかし、実際との乖離は出ています。

岡本| 先生は、海外の大学でずっと教えられてきましたけど、外国の学生さんは、日本の学生さんと比較すると、早い時期に自分のやりたい分野に対してめどがたっている気がします。その辺はどうですか？

杉山| アメリカの学生さんは、借金して大学に行きますよね。そういう点の意識は高いでしょうね。自分の将来のことを考えて、自分の借りたお金をどこにどういう風に投資して自分を高めていくのか。日本の場合は、大体親が全部学費を出しますよね。日本も奨学金を利用する学生さんもたくさんいます。今、奨学金は月10万円、有利子で簡単に借りられますよね。4年間で480万円。理系だと大学院に行くのでプラス200万円。ただ大学を卒業する時に700万円位の借金は、ちょっと気の毒ですよ。

岡本| 今、アメリカでは大きな借金をしてようやくMBAをとった学生さんの就職口がなく、返済ができなくて困っています。ちょうどブームがあったのでMBAを持っている人が山ほどいるわけですよ。企業もそうそう雇用を増やす環境ではないから、大学を出ているのに就職口がない。でもローンだけはドーンと背中に背負っている状態ですよ。ある意味、高学位の人に対する需給関係が崩れてきてしまっている。例えば中国やインドで大量の高学位の人達が大量生産されてきているわけですよ。学位だけでは就職口がなくなってきました。昭和初期の「大学を出たけれど」という時代と全く同じ状態ですよ。国民が少し豊かになってくるとみんな大学を出るけど、実態経済の方はそんな膨らんでないから就職口がなく余ってしまう。これと同じ現象がグローバルな規模で起きている気がしますね。

杉山| インドというのは、統計学の最先端の国ですね。私が学んでいた1960年代にはどこの大学に行ってもインド人の統計の教授が何人かいました。統計学はイギリスとインドとアメリカが



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

盛んですね。日本は、20年前の日本統計学会60周年の時に、様々な企業のいろいろな分野で活躍してもらう為に、4年間学べる統計学科を持つべきだという議論があがりました。しかし実際は、その議論を聞いた韓国の教授が帰国して、今、韓国には統計学科ができています。私は、4~5年前に高麗大学に行って大学院の生徒向けに講演をしてきましたが、半分位は女性の参加者でしたね。統計学は女性に人気があるようです。しかし残念なことに、日本には統計学科がどこの大学にもありません。向こうでは4年間、統計のアンケート調査の作り方等きっちり勉強した後、更にもう2年間勉強して、いろいろな企業で統計学を駆使しているのですけれどね。ただ日本の人って賢いから、調査しなくても大体調べてきますけどね。僕たちの頃は韓国と日本だと、比較にならないほどアジアでは日本がトップをいっていましたが、そういう後継者が出てこないというのは厳しいです。レベル的には、日本はもはやトップではないのですね。2年前に、マレーシアのクアラルンプールの大学に行きましたが、驚くべきことにそこに統計学科がありました。学生さんは100人位の定員がおり、先生方は40人位いて、大学院教育までしっかりやっています。日本にはないのに、マレーシアにこんな立派な統計学科があるのかと印象的でした。アジアの他の国もそうでしょうけどね。インドは昔から統計学科の最先端の国なので、インド人の統計学者はすごく多いです。ただ最近のインドは情報系の人が多いですよ。今は統計から情報系にシフトしているのかもしれないね。

岡本| 最近統計学の本が良く売れたりしているようですが、このようなことをきっかけに日本でも統計の大切さがもっと認知され、活用されるようになることが必要ですね。益々のご活躍を祈っています。本日は大変多岐に渡るお話をありがとうございました。

＜モデルポートフォリオ：2013年6月末の運用状況＞

単位：％

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率			
		1か月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～ 162万円
4資産型	積極型	-2.06	41.79	1.44	4.90	16.17	24.62	39.12	28.99	34.09
	成長型	-1.84	30.65	1.93	4.19	11.40	17.73	29.55	25.64	32.69
	安定型	-1.62	20.24	2.12	3.24	7.23	11.24	20.10	21.29	29.73
2資産型	積極型	-4.01	40.15	1.88	5.66	18.40	20.97	40.90	35.45	43.66
	成長型	-3.33	31.85	2.10	4.76	13.51	16.73	31.92	30.64	40.84
	安定型	-2.65	23.94	1.98	3.62	9.32	12.64	23.02	24.61	36.00

* 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2012年6月末に1万円投資資金を積み立て始め、2013年5月末の投資資金までとする(2013年6月末積み立て分は運用期間がないため含めていない)。出所：イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンまで。

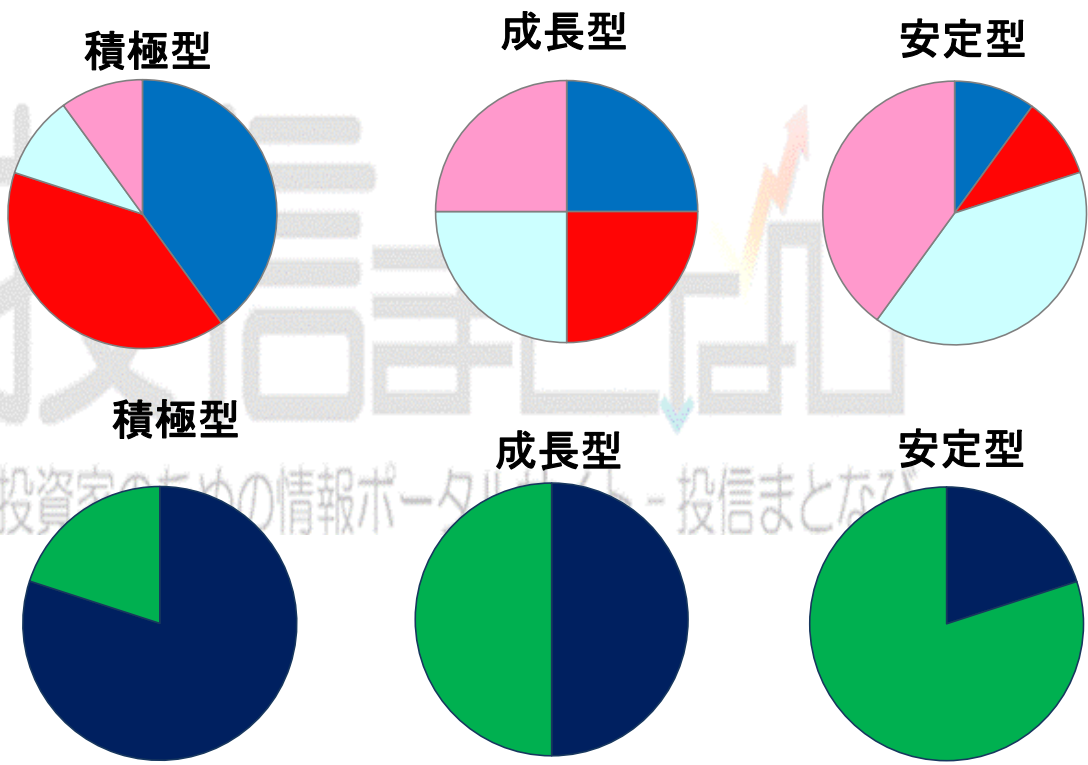
ポートフォリオの資産配分比率(外貨建て資産は円換算ベース)

4資産型		国内株式: TOPIX	外国株式: MSCI KOKUSAI	国内債券: NOMURA- BPI (総合)	外国債券: Citi WGBI (除く日本)
		積極型	40%	40%	10%
成長型	25%	25%	25%	25%	
安定型	10%	10%	40%	40%	
2資産型		世界株式: MSCI ACWI (含む日本)		世界債券: Citi WGBI (含む日本)	
		積極型	80%	20%	
		成長型	50%	50%	
		安定型	20%	80%	

ポートフォリオは「インベストラ이프」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストラ이프』のその他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

- 4資産
- 国内株式: TOPIX
- 外国株式: MSCI KOKUSAI
- 国内債券: NOMURA-BPI (総合)
- 外国債券: Citi WGBI (除く日本)
- 2資産型
- 世界株式: MSCI ACWI (含む日本)
- 世界債券: Citi WGBI (含む日本)



<純資産上位ファンド(毎月および隔月決算型を除く):2013年6月末の運用状況>

当資料は「インベストライフ」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。
※ファンド名をクリックすると「投信まとなび」でそのファンドを見ることができます。

「長期投資仲間」通信「インベストライフ」の
その他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

今回 順位	前回 (13年 3月末) 順位	運用会社名	ファンド名	トータルリターン				リスク 10年 (年率)	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の 月末資産額				2013年 6月末		イボットソン 分 類
				1か月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)		1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～ 162万円	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月～ 162万円	純資産 (億円)	基準価額 (円)	
1	1	フィデリティ投信	フィデリティ・日本成長株・ファンド	-0.62	49.88	-0.46	4.00	21.60	32.52	37.28	17.12	17.68	15.90	82.37	140.54	190.64	3,498.4	14,021	国内株式・大型成長型
2	2	さわかみ	さわかみファンド	-1.94	44.38	-0.15	4.57	20.15	31.23	30.21	16.60	26.09	15.75	78.12	139.92	204.27	2,936.2	15,092	国内株式 ・大型ブレンド型
3	3	日興AM	インデックスファンド225	-0.65	54.06	1.65	5.21	21.60	34.14	45.41	29.25	29.46	16.10	87.24	155.10	209.72	2,465.4	3,706	国内株式・大型成長型
4	7	JPモルガン	JPMザ・ジャパン	-8.11	95.70	17.18	19.40	33.83	56.77	112.61	143.11	226.19	18.81	127.57	291.74	528.42	2,037.6	39,987	国内株式・中型割安型
5	4	みずほ投信	MHAM株式インデックスファンド225	-0.64	53.98	1.56	5.13	21.52	34.12	45.24	28.81	28.78	16.09	87.15	154.57	208.62	1,746.0	2,493	国内株式・大型成長型
6	6	DIAM	日経225ノーロードオープン	-0.61	53.35	1.27	4.82	21.52	33.79	43.98	26.93	26.34	16.05	86.39	152.31	204.67	1,490.1	9,054	国内株式・大型成長型
7	5	ニッセイAM	ニッセイ/パトナム・インカムオープン	-5.09	25.60	3.75	1.64	9.81	12.62	27.74	24.16	27.75	13.51	76.65	148.99	206.95	1,366.0	6,410	外国債券・米国型
8	8	日興AM	GW7つの卵	-3.11	35.60	0.94	3.69	14.02	19.00	29.22	19.05	-	14.28	77.53	142.86	-	1,184.1	9,331	アセットアロケーション ・積極型
9	9	三菱UFJ投信	三菱UFJ インデックス225オープン	-0.65	54.21	1.75	5.32	21.60	34.25	45.66	29.80	30.19	16.11	87.40	155.76	210.92	1,129.1	8,516	国内株式・大型成長型
10	12	三井住友AM	トヨタグループ株式ファンド	0.44	78.83	5.07	-	-	52.46	78.77	-	-	18.30	107.26	-	-	1,054.4	18,695	国内株式 ・地域/グループ型
11	11	野村AM	ノムラ日本株戦略ファンド《Big Project-N》	-0.48	50.71	-1.06	3.82	20.25	33.43	39.98	18.55	-	16.01	83.99	142.26	-	979.5	6,574	国内株式・大型成長型
12	16	大和投信	ストック インデックス ファンド225	-0.63	54.00	1.59	5.13	21.58	34.12	45.29	28.92	28.93	16.09	87.17	154.71	208.86	858.5	6,165	国内株式・大型成長型
13	14	野村AM	グローバル・ハイインカム・ストック・ファンド	-5.67	44.41	2.09	-	-	20.38	41.28	-	-	14.45	84.77	-	-	805.6	7,300	外国株式・世界型
14	17	フィデリティ投信	フィデリティ・ジャパン・オープン	-0.62	49.81	-0.47	4.03	21.70	32.45	37.39	17.20	17.87	15.89	82.43	140.64	190.95	787.3	9,844	国内株式 ・大型ブレンド型
15	10	HSBC投信	HSBC ブラジル オープン	-16.67	18.21	-8.49	-	-	-2.73	4.00	-	-	11.67	62.40	-	-	757.1	9,114	外国株式 ・新興国型(単一国)
16	13	国際投信	グローバル・ソブリン・オープン(3ヶ月決算型)	-5.94	19.52	0.12	1.81	9.51	8.06	14.23	13.57	24.04	12.97	68.54	136.28	200.95	752.0	6,317	外国債券・世界型
17	-	野村AM	野村日本高配当株プレミアム (通貨セレクトコース)年2回決算型	-8.84	50.48	-	-	-	25.65	-	-	-	15.08	-	-	-	750.9	14,888	国内株式・セクター型
18	19	フィデリティ投信	フィデリティ・日本配当成長株・ファンド (分配重視型)	-0.74	48.52	2.72	-	-	31.37	39.42	-	-	15.76	83.65	-	-	715.0	8,235	国内株式・大型割安型
19	-	野村AM	野村ハイパーブル・ベア3(日本ハイパーブル3)	-4.24	157.08	-	-	-	96.84	-	-	-	23.62	-	-	-	691.4	25,708	デリバティブ ・ブルベア型(株式型)
20	81	野村AM	野村リアルグロース・オープン	-3.35	58.01	2.86	-	-	35.34	61.14	-	-	16.24	96.68	-	-	689.9	12,445	国内株式・中型成長型

対象は追加型株式投資信託のうち2013年6月末時点で1年以上の運用実績があるもの(毎月・隔月決算型、ETF、DC・SMAなど専用投資信託を除く)。

積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとす。例えば1年の場合は2012年6月末に1万円で積み立てを開始し、2013年5月末投資分までの2013年6月末における運用成果とする(2013年6月の積み立て額は入れない)。

出所: MorningstarDirectのデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてお気軽にご送信ください。